

淡 春

t a n s e i

19

2007/02

[特集]

本と東大。

[特別座談会]

本と図書館と大学を語る

[TOPICS]

「知の社会還元」を実現するProprius21

東京大学創立130周年記念事業——時代の先頭に立つ

[歴史のきざしから]

第2回 一高野球部、大勝利の日

[サイエンスへの招待]

「歴史認識」、「ナショナリズム」を科学することは可能か？

バリアフリー科学の夢

[キャンパス散歩]

理学系研究科附属天文学教育研究センター木曾観測所

本郷キャンパス・総合図書館の建物は関東大震災の後、米国のロックフェラー財団から援助を受けて1928年に再建されたものです。建物正面のデザインは「書架に並ぶ本の背を模した」と言われています。

「淡青」について

東京大学と京都大学（当時は東京帝国大学、京都帝国大学）が1920年に最初の対抗レガッタを瀬田川で行なった際、抽選によって決まった色が「淡青（ライト・ブルー）」であり、本学の運動会をはじめスクール・カラーとして親しまれてきました。



index

p.03-25

【特集】

本と東大。

【特別座談会】

本と図書館と大学を語る

p.26-27

【TOPICS】

「知の社会還元」を実現するProprius21
東京大学創立130周年記念事業——時代の先頭に立つ

p.28-29

【歴史のきざしから】

第2回 一高野球部、大勝利の日

p.30-31

【サイエンスへの招待】

「歴史認識」、「ナショナリズム」を科学することは可能か？
バリアフリー科学の夢

p.32-33

【キャンパス散歩】

理学系研究科附属天文学教育研究センター木曾観測所

p.34-35

【キャンパスニュース】

淡青19号をお届けいたします。今回は特集として、「本と東大」という内容を取り上げました。

特別座談会では樺山紘一印刷博物館館長、渡邊あゆみNHKチーフ・アナウンサー、西郷和彦本学附属図書館長に「本と図書館と大学」に関して、本の歴史から大学の役割、電子ジャーナルまで、多方面にわたって語っていただきました。

東大が持っている貴重書である東大コレクション、史料編纂所の活動、さらに柏キャンパスに新しくできた自動書庫を持つ新しい図書館など、東大のさまざまな分野における「本」の役割と、東大がどのようにして「本」と向き合っているかについてご紹介いたします。

850万冊の本を持つ東大が「本」を通じて、社会に対する役割を過去から未来にかけて果している姿をご覧ください。

広報委員会委員長 高増 潔

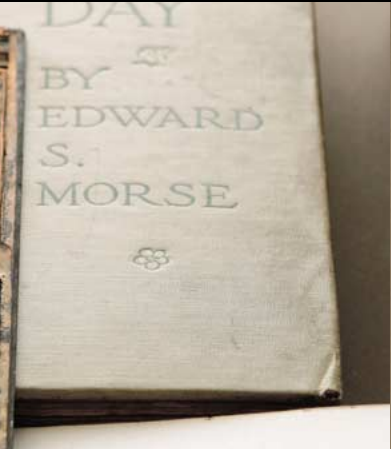
【写真・左上】 Schedel, Hartmann. "Liber chronicarum" Nurnberg, 1493 (ハルトマン・シェーデルの揺籃本『年代記』1493年)、Dürer, Albrecht. "A. Dvrervs... versus e Germania lingua in Latinam pictoribus, fabris eraris ae lignariis... prope necessarius, adso exacte quatuor his suarum institutionum geometricarum libris lineas superficies et solida corpora tractavit..." Par., 1584 (アルブレヒト・デューラーの『幾何学教本』ラテン語版1584年)、Montfaucon, Bernard de. "L'antiquité expliquée et représentée en figures" 2. éd Par., 1722. tom. 1-5 (in 10 vols.) (ベルナルド・ド・モンフォーコンの『古代図説』全5巻10冊1722年) (以上、亀井文庫) 【写真・右上】『近世伎史』貼込帖 第二編 (霞亭文庫) 【写真・左下】 Morse, E.S. "Japan Day by Day" 1917年初版(理学部生物学科図書室所蔵)、および、その初刷の鉛板 (モース文庫) 【写真・右下】 様々な年代の『御成敗式目』。箱入り写本 (楠長庵筆・天正年間・穂積の書入あり)、卷子本 (清原枝賢筆・天正年間)、天正10年写本、慶長3年写本、寛政元年版本、明治年間版本 (以上、穂積文庫)

※以上、所蔵が明記されていないものは、すべて総合図書館所蔵



本と東大。

東大は誕生以来、常に「本」とともに歩んできた。本がある。そして、学ぶ者がいる。この両者の関係こそが本学の「知」の原動力なのだ。書物の国・東京大学によくこそ。めくるめく知の大迷宮の扉が、今、開かれる。





西郷和彦

東京大学附属図書館長

渡邊あゆみ

NHKチーフ・アナウンサー

樺山紘一

印刷博物館館長

[特別座談会]

本と図書館と 大学を語る

大学に生きる人々は教職員も学生も、それぞれが「本」との密接なつながりを持っている。そこで今回は、樺山紘一印刷博物館館長、渡邊あゆみNHKチーフ・アナウンサー、西郷和彦本学附属図書館長に「本と図書館と大学」に関して語っていただいた。まさに「知」の本質が表れている談話といえよう。

東大の図書館の構造

東大の図書館
(東京大学附属図書館)

総合図書館
(本郷)

駒場図書館

柏図書館

各部局(学部・研究所等)の
図書館(室)

東京大学附属図書館HP
<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/>

渡邊 今日は特集のテーマである「本と東大」について、図書館のことなどを中心にいろいろお話しいただきたいと思っています。大学図書館のあり方は、新しい時代の大学のあり方と関係してくると思われませんか。そもそも「大学」という制度が始まったのはいつ頃なのでしょう？

榊山 大学は、元々、ヨーロッパ中世に始まった教育施設です。パリ大学、オックスフォード大学、イタリアのボローニャ大学といったヨーロッパの大学は12世紀、13世紀に相次いで出来ました。それらの大学は、形は変わったし、サイズも大きくなったけれども、今でもほとんどそのまま残っています。それ以前の学問の府は、やはり修道院ですね。ヨーロッパ中世という時代は基督教の支配下にあったわけですが、当時の書物はごくわずかな人、特に基督教の聖職者が読んでいました。それらの書物は、ほとんど修道院で作られ、読まれていました。

渡邊 もちろん手書きですね？

榊山 そうですね。印刷術は15世紀半ばに登場しますが、それまでは全部手書きで原本から写本を作っていました。写本を作ることが修道院の大きな役割だったんです。とても大変な仕事でした。旧約聖書・新約聖書両方あわせて、基督教の聖書1組を書き上げるのにペテランの「写字生（書写する人）」ひとりの力で約1年かかったんです。すべてラテン語で。もちろん作ることも修行です。写経のようなものですね。その後、大学ができると、先生や学生がいて修道院より人間が増えますから、教育研究用の書物が必要となる。エキスパートの写字生を雇って、大学の中で作り始めるわけです。そうやって、初めて「大衆化」とまでは言えませんが、修道院時代よりはるかに数多い写本が流通するようになったんです。でも、高い。聖書1冊が

1年かかるわけだからとても高価でした。

渡邊 図書館といいますと、大量の本がおさめられている印象がありますが、当時の図書館というのは？

榊山 東大の図書館みたいな大きな図書館があるわけではないし、本は高価で読む場所も限られているので、本当に小さいものでしたね。それでも、のちにソルボンヌと呼ばれるようになったパリ大学には中世末の15世紀では、何百冊も写本があったようです。でも、なにせ、大きな写本ですし、皆で読むわけだから借りていかれると困るわけです。

渡邊 そうすると、貸し出しはしていなかったんですか？



榊山 貸し出ししないどころか、多くの場合はチェーンがついていて、持ち出せないようになっていたんですよ。本は修道院または大学の図書室に行って読むものだったんです。1冊の本を読むために、多分、行列を作って順番待ちをしていたんだと思います。

渡邊 大学の図書は、その起源を思えば大変重みのあるものだということですね。

榊山 そうですね。その後、15世紀半ばにグーテンベルクによって活版印刷術が開発されて、本はずっと安くなったし、冊数も増えました。でも、そうなればなるほど、大学は書物を揃えなければなりません。「大学教授がいて本があるということ」が、大学のメリットでもあるし、シンボルでもあるわけですか

ら。

書物はきっかけの宝庫

渡邊 西郷先生のご専門は化学ですね。理系の先生方にとって、「紙の本」はどんな価値を持っているんでしょうか？

西郷 例えば過去20年間の仕事がまとめられているような書物は私達にとって非常に大事なですね。最近、そういう本も電子化されるようになってきました。学術雑誌の電子ジャーナル化が急速に進んでいますし、書物も電子ブック化が進んでいます。研究の上ではそれもいいと思うんですが、「教育の上では電子化された書物は良くない」というのが私の立場です。やはり、目を動かして紙をパラパラとめくりながら読んでいくことが大切です。そういう読み方をすると、自分が目的としないページでハッと目が止まる瞬間があります。

渡邊 あります、あります。辞書を引いていてもそうですね。

西郷 それが「教育」だと思うんです。「理系の本は電子化が進んでいるので、もう紙は要らないんじゃないか」などとよく言われますが、今だからこそ、「紙を大事にしたい」と思っています。私の研究室では十数種類の電子ジャーナルを学生に読ませています。同時に「紙の本」も買うようにしています。電子ジャーナル化された文献は「いくつかのキーワード」でしか探せない。特定のキーワードで探していくと、教育上大きな文献が漏れることもあるわけですね。つまりそれは、研究上必要なキーワードなのであって、「教育上必要なキーワードはひとつに決まらない」と私は考えています。

榊山 研究調査にはいろいろな側面があります。「本をピンポイントで探す」ことは英語でlook for、looking forと言



いますが、それ以外にsearchという言葉がありますね。ある事柄を探すけれども、その周囲のところを見てみるとか、「何かおもしろいことがないかな」といって開けてみるとか。学問にはこの両面がある。looking forでもあるけれどもsearchする仕事でもあるんです。そのために、紙の本が大切なんですね。

渡邊 受験生は塾の先生から「電子辞書を買いなさい」と言われます。「英単語を調べるのに電子辞書なら1秒で済みますよ。しかも、最初の数文字で引けます。何千語かの英単語を覚えるのに費やす膨大な時間の浪費を防げます」と言われて買ってしまうんです。だけど、私達、親としては、広辞苑や大辞林を引いた時に目当ての言葉の近くに偶然見つけるちょっと違う絵に「これ、なんだろう」と興味を持つことが大切だと思えるんですね。

樺山 探した言葉の隣の言葉とかね。

渡邊 ええ、そこに発見や喜びがあると思うんです。受験生達は電子辞書の小さな画面をスクロールしながら見ているので、そういう発見は少ないかもしれない。電子辞書世代の子達が東大に入学してきて、その中の優秀な学生は研究者になるだろうし、次世代を育てることも担っていくわけですね。そう考えると、先生方が学生に書物の重要性を説いていくことは大切ですし、とても大変なことですね。

西郷 先ほど樺山先生がおっしゃった「昔は本を作るためにとてもお金を使

っていた」ということを、私達現代人はもっと考えなくてはいいですね。学習、教育とは「いかに無駄を認めるか」ということ。あえて言うならば、「昔の大学は無駄を求めて1冊何百万円もする本を揃えてきたのだ」と思うんです。便利になったから、安くできるから、と効率だけを求めるのはこれからの日本にとって良くないと思います。そういう意味で図書館の使命はもっともっと強くならなければと思っているんですよ。

渡邊 南方熊楠を番組で扱ったことがあるんですが、彼は大英博物館図書室に毎日通って、自分で本を写しているんですね。それを知って、私、ずっと疑問に思っていたんです。若き日の大英図書



学生に書物の重要性を説いていくことは大切ですし、とても大変なことですね。

館通いの日々……現代なら「コピーすればいいのに」とか「ネットで見ればいいのに」と思えるような膨大な時間を最初から研究に充てていたら、熊楠はもっとすごい研究ができたのかしら、と。「手書きで覚える」という作業の価値を、先生方はどのように考えていらっしゃいますか？

西郷 昔の私は、先ほど申し上げた20年くらいの進歩が書かれている本や学術雑誌を読んで、自分で要約して、要点をノートに書き込んでいました。すると、1ページの要約が3行くらいになります。つまり、1ページを理解していないと3行書けないわけですね。それをためておいて、後で見返して、「あのことはこうだったな。じゃ、こういうこともできるか

もしれない」と考えるわけです。一度、読んでいることによって、もう頭が動いているんですね。ところが、現在の学生達はコピーして机の上に積んでおく。我々、よく、学生に言いますよ。「君は積んでおくのがうまいな」(笑)。

樺山 それから、今の学生の中には、「レポートを書け」というと、こっちの文献の3行と向こうの文献の3行をくっつけるという作業でレポートを作ってくる人がいます。だから、前半は「である」調で、後半は「です・ます」調という代物が上がってきたりする(笑)。語尾なんて、気にしていないわけです。差し当たり、レポートはできるけれども、自分の手で覚えていないものだから、自分の身につけていないんですね。

東大内の書籍の「ありか」は？

樺山 東大全体の蔵書は、現在、800万冊くらいですか？

西郷 850万冊ですね。

樺山 この850万冊がすべて総合図書館にあるわけではない。ほとんどの本が、各学部・研究所など色々な所に分属しているわけですね。例えば、私は文学部出身ですが、文学部図書室に行けば文学部の蔵書が全部あるかということ、違う。文学部には30以上の研究室があるのですが、それぞれに分かれて所蔵されています。

渡邊 研究室ごとにライブラリーが



あるとイメージすればよろしいですか？

榊山 そういことなんです。工学部は今、いくつですか？

西郷 16の専攻ごとの図書室がこの春、工学・情報理工学図書館として、ひとつの組織になりました。場所は専攻の建物に分散配置されています。



榊山 研究室・教室にはそれぞれの慣行がありますので、本の並べ方、分類の仕方を自分達のやり方でやっています。それらは全部東大の本ですから、理屈からいえば、調べたい時にそこへ行って「東大の本を見せてください」と言えば見られるはずなんです。しかし、実際にはバリアが高いので、飛び込んで行っても普通は見せてくれませんでしたね。最近は大分変わりましたが、古くからの研究者の意識としては、東大の図書館に登録された本ではあるけれど自分で抱えていたんですよ、やはり。

渡邊 また、東大の場合には「寄贈された本」が多いですね。そういう寄贈本はどう管理していらっしゃるんですか？

西郷 たしかに、寄贈本が大変多いのが本学の特徴だと思います。退職された先生方の所蔵本が、どっと来たりしますね。これにはちょっと問題があります……かなりの部分がすでに所蔵されている本と重複しているんです。しかし、いただくのはとても嬉しいことです。寄贈して下さる方のお気持ちを考えると「要らない」とは言えません。捨てるなんてとんでもないことですね。その結果、図書館で長く保存すべき一群の所蔵本が

ある以外に、寄贈された本がゴソツとあるという状況になりつつあります。

榊山 寄贈はありがたいのですが、それを収納する場所の問題と整理するための人件費の問題が出てきますね。それから、〇〇先生からいただいた本は「〇〇文庫」と名づけて少し格がある形で保存したい。そうすると、他の所蔵本と違って「〇〇文庫」の本は分類の対象にならなくなってしまう。検索が難しくなるわけです。

渡邊 「〇〇文庫」でまた別に分類リストを作っていくのでは、大変非効率になってしまいますね。

西郷 私どもの今のアイデアでは、「〇〇文庫」というのはバーチャルにして、全体の分類に従って配架しようと考えています。そうしないと、10年後には大混乱になると思いますから。

渡邊 それらを一時的に収蔵するための書庫のスペースは足りているんですか？

西郷 うーん……本学では、2005年の1年間にほぼ20万冊の本が増えています。増加分の書架が6,000メートルも必要なんです。具体的には、文系の先生の研究室は小さな机と通路以外、すべてのスペースに本が積んであって、傷まずに保存できる場所に置きたい本も山積みでせざるをえない……そんな状態ですね。

理系と文系の本の違い

榊山 統計値があるわけではないんですが、日本の研究者、特に文系の研究者は個人的にも公にも、本をたくさん持つ傾向がありますね。遡れば奈良時代以来、本との付き合いが非常に密接だったということがありますでしょう。書物の

量も多いし、本を自分の手元に置いて勉強するという習慣ができていますので、文系の研究者達は自分の図書館を建てているようなものです。自分の家は本だらけ。ときどき根太が抜けたりしてね。そんなに自分ひとりの図書室を作らなくていいじゃないと言われるんですが、総論はそのとおりです。でも、やはり、ふだん使う本や新しく出た本は手元に置きたいという気持ちがあります。結果として、家の中は本だらけになっている、と。

渡邊 先ほど西郷先生は「書物は重要である」とおっしゃいましたが、理系の先生方の傾向としてはいかがですか？

西郷 理系の分野では、大体10年で教育、研究に使う本の寿命がなくなるんです。

渡邊 先端の研究ですものね。

西郷 理系の先生方は10年から15年経つと、ビニール紐で縛って整理してしまいます。かなりのペースで回転しますので、私の部屋に仕事の本は300冊くらいしかありません。300冊というと、高校生の蔵書くらいかな（笑）。仕事上の本は。



渡邊 それは理系の本の宿命ですね。

榊山 今では、理系の先生方も「古い本を捨てる」とおっしゃいませんが、長い間、そのことを理解していただくためには苦労しました。「明治時代の本なんて、なぜ、要るのか」と言われるんですが、明治時代だろうが、江戸時代だろうが、その本が持っている意味がいつ表



に出るか分からないですからね。

西郷 科学史をやっている私の友人は、研究材料となる本がなかなか手に入らなくて苦労しています。大学図書館はそういう文献もちゃんと保存しておかないと、何十年か後に20世紀から21世紀の進歩を眺める人の研究材料がなくなってしまう。それから、先ほど申し上げたように、紙をさわりながら思考を巡らせる時間や、私達が直接知ることのできない200年、300年前の時代を頭に思い浮かべる時間は、とても重要な時間だと思うんです。

榊山 「書物のアナログ性」というのは、人間の知的な仕事にとって必要なんですね。「デジタル化して、元の本は廃棄してもいい」という意見もあるけれど印刷された本に実際に触れることの大切さもありませんでしょうか？ 表紙がついている、装丁されている、アルファベットも漢字も平仮名もそれぞれ活字の字体が違

う。そして、かつて読んだ人が付けたしみが残っている……これらすべてを合わせて「本」なんですね。

東大の図書館に息づく 貴重書の数々

榊山 総合図書館は1923年（大正12年）の関東大震災で建物が燃え、蔵書もほとんど灰になってしまったそうです。そこから、再出発したわけですね。

渡邊 それもロックフェラーさんからのご寄附によってですね。

西郷 そうなんです。ロックフェラー一財団から当時で400万円、今でいうと400億円くらいだと思いますが、寄附をいただいたんですね。

榊山 そのご寄附で現在の総合図書館の建物が建てられ、蔵書のほうは世界中から寄贈いただきました。今でも書物

の表紙裏に、大震災の被害を受けた東大図書館に〇〇が寄贈したものであるという判子が見えることがあります。

西郷 各方面から多数の寄贈をいただいているのですが、その中には貴重な本が多々あります。たとえば、総合図書館には「森鷗外の書き込み本」があるんですよ。

渡邊 鷗外本人の書き込みがある本？

西郷 はい。鷗外文庫は1万8,000冊ですが、その中に、鷗外の「鉛筆による細かい書き込み」がある本があるんです。請求すれば誰でも見られますから、過去には、学生が「いたずら書きだ」と思って書き込みを消してしまったという「事件」もありました（笑）。

渡邊 えー！ 罰当たりですね（笑）。

西郷 この鷗外書き込み本なども電子化すれば良いというタイプの本ではありませんね。実際、実物を手に取ってみると、手が震えるというか。

渡邊 でしょうね。あの鷗外が自ら鉛筆で、しかも筆跡も生々しく、ですものね。

榊山 寄贈・購入の如何にかかわらず、「東大の図書館以外にはすでにない貴重本」がいくつもありますよ。よく話題になるんですが、江戸時代の思想家、安藤昌益の『自然真営道』という本は原稿も刊本もほとんど残っていないんです。残っている刊本が現在3組。この刊本ではなく原稿のほう、つまり、稿本は12巻分、総合図書館にあります。これにはドラマがありまして……1923年（大正12年）に東大の図書館が稿本全揃い101巻91冊を買ったんです。すると、その年に大震災があって、燃えてしまった。全部

燃えたはずだったんですが、実は12巻分だけ東大の三上参次先生という方が借り出して、お宅にあった。だから、その12巻だけが残ったんですね。今でも総合図書館に収蔵されています。40年近く前、学生時代の私はこの稿本の実物を読んだことがあります。大学院の授業で「安藤昌益を読もう」ということになって、総合図書館に読みに行きました。貴重書庫から出してもらって稿本の実物を手に取った瞬間……緊張感で手が震えましたよ。「これがあの震災で焼け残った本なんだな」と思ってね。安藤昌益の場合は活字で起こした近代印刷本が出ているので「それを読めばいい」とも言えますが、やはり、稿本に価値がある。1行の中に大きい字があったり小さい字があったり消してあったり。筆者の思考過程を探るには原本でしかやりようがないんです。写真に撮ったものを見ても、やはり、だめです。原物でないからね。

渡邊 筆圧などに心理が投影されているわけですね。パソコン全盛時代となったからこそ、「肉筆」が大事なんですね。

榊山 そういうことも、やはり、図書館の使命だと思います。

書物の管理・保存の難しさ

西郷 ご存知のように、東大の図書館では図書を整理するのにカードを書いていたんですが、現在ではコンピュータ入力によって登録しています。すでに所蔵されている本の登録を「遡及入力」と言いますが、本学では、まだ、古いほうの100万冊強が未入力なんですね。100万冊を入力するのに、多分、10人がかりで10年くらいかかって、年間何千万とお金がかかるんです。

渡邊 それらはどういった形で東大に集まってきたものなんですか？

西郷 先ほど申し上げた関東大震災の後に、色々なところから急激にご寄附いただいたものです。今なら、受け入れた時に入力していますが、古いほうの入力が追いつかなくてそのまま書架に並んでいるんです。この間も、ある先生から「一般の書庫のところにこんな大事な本を置いて」とお叱りを受けたんですよ(笑)。

榊山 たしかに、本は「お宝」なので大事に扱わなければいけませんね。でも、「使ってこそ本」ですから。

渡邊 読んで、活かして。

榊山 簡便に本を手にとれるということを見ると、箱に入れて奥にしまっている本は生きてこない。特に、大学図書館の本は先生や学生が読んで初めて生きる本ですからね。大学図書館の役割や使命を考えると、ここは難しいところですね。

渡邊 そのような「本の管理」という面で考えますと、史料編纂所でコツコツやっていたら「史料保存・修復作業」というのは、本当に大切な仕事ですね。先日、その保存・修復作業を拝見したんですが、これがまた、本当に気の遠くなるような大変な手作業でした。

榊山 「保存・修復」という仕事はあまり世の中で注目されませんが書物にとって決定的な作業でしてね。本は酸化したりネズミや虫が食ったりして傷みます。だから常に状態を見て、虫干しをしたり崩れた部分を直したりする必要があります。水害で水を被ってしまう場合などありますが、読みやすい状態に戻すのは大変な作業で、もう、プロの仕事ですね。

西郷 そういう仕事は、やはり「日本人が文化をどのように捉えるか」という根本の部分につながっている気がします。「日本は紙と木の文化だから、建物で



「書物のアナログ性」というのは、人間の知的な仕事にとって必要なですね。

さえも100年ごとに消えてなくなるのだ」という意識を変換しない限り、なかなか難しい。ヨーロッパには過去300年間、順番に修復し続けていて足場が取れたことがない古い教会がありますね。本来、本もそうあるべきなんですね。

大学図書館の使命は「サービス」

西郷 私は「国立大学の附属図書館である」という従来の考え方を変えなければと思っています。2年前の館長就任以来、事務部長らとともに頑張ってきたことは要するに「サービス」なんです。大学には一番向かない言葉、「サービス」。サービスができるかどうか……飲食店が新鮮な材料を仕入れて、料理を工夫するのと同じように私達も常に新鮮な材料を用意して利用者の学生や先生方に利用していただく。ではその新鮮さを保つにはどうしたらいいか？ これだけ冷凍技術



が進んだのだから、本だってそういうことに気を配るべきじゃないか、と(笑)。

渡邊 なるほど。では、その「サービス」という面も含めまして、これからの大学図書館のあり方はどうあるべきだとお考えでしょうか？

樺山 従来の大学図書館は大学の研究と教育に資するものでしたから先生と学生を対象に考えていましたが、現在は、大分、事情が変わってきました。今は東大の図書館も市民がしかるべき手順を踏めば閲覧できるようですね？

西郷 入り口で閲覧したい資料を申し出ていただければ、外部の方もご覧になれます。

渡邊 変わりましたよね。立派な建物ですから、一般の方にも中に入って見ていただきたいですね。2007年以降、いわゆる「団塊の世代」の方々が大量に定年を迎えますでしょうか。「定年後の自由な時間を使って知的なものを求めよう」と大学に目を向ける方も一気に増えてきそうですね。東大が創立130年ということもありますし、市民に向けての新しい図書サービスなどはありますか？

西郷 そこがなかなか悩みどころでして……外部の方には貸し出しができないことになっているので、閲覧室で読んでいただくことになるんです。

渡邊 東大の図書館を覗いてみたい



考え方の切り口が違うだけで、本や図書館を大切にすることは同じだと思います。



という方は多いと思いますので、広く世間に公開してほしいという気持ちはありますね。まして、柏の立派な施設は。

西郷 柏図書館は、学術研究、調査、生涯学習を目的とされる場合は外部の方々もご利用いただけます。

樺山 図書館は、本を閲覧していただくという機能以外に社会的サービスとして「貴重な本を展示して見ていただく」という機能がありますね。総合図書館にも史料編纂所にも貴重本がたくさんあるので展示して見ていただく。まさか、国宝『島津家文書』を自分個人で引っ張り出して読むというわけにいかないですから。

西郷 総合図書館でも定期的に、ホールで展示をやっていますが……今、私達、図書館関係者は『メディア・ユニオン』というアイデアを持っています。これは、利用者が「電子データ資料の利用」と「書籍の閲覧」を両方できるスペースを作るというアイデアです。もちろん、自動書庫とITを駆使してスピーディな提供を行ないます。そのスペースに「プロムナード」を作ろうと考えていまして。プロムナードでは史料編纂所の保存書庫と連結して「一般公開できる展示場所」を設けようとして計画しています。しかし、先立つものがなくて、なかなか進まないんですよ。

樺山 従来、「図書館が所蔵物を展示することは本来の機能ではない」と考えられてきましたが「実は本来の機能なのだ」と私は思いますよ。図書館が展示

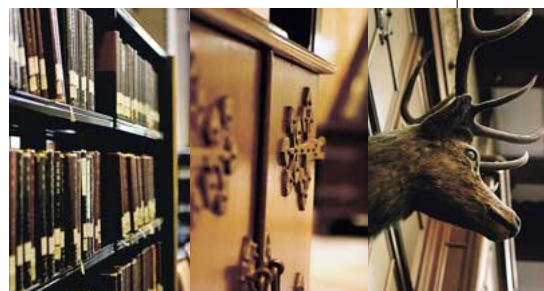
を行なうのは世界的な流れとなりつつあります。

渡邊 図書館サービスということで考えると、今、西郷先生が「自動書庫とIT」というお話をされましたが、柏図書館はまさに未来的サービスを始めていますね。

西郷 はい。柏図書館には100万冊分の蔵書を入れられる自動書庫を設置しました。その自動書庫と組み合わせる形でITも最大限に活用することになっています。

電子媒体と紙媒体は東大の図書館の両輪

西郷 私はまだ現役の学者のつもりですから、東大の図書館職員には「僕は



趣味で図書館をやっているんだ」と言っていますよ(笑)。趣味とは言っても、当初は遠い存在でしたね、図書館というのが。

渡邊 理系でいらっしやるからですか？

西郷 ええ、理系であるがためにですね。振り返れば、自分の趣味で「おもしろそうだ」と本を買って読むことはあっても、読書に生きがいを感じることは少なかったと思います。しかし、小宮山総長が東京大学附属図書館長だった時代に館長補佐を2年間やらせていただいて「これは理系も文系もないな」と感じま

した。「考え方の切り口が違うだけで本や図書館が大事だという心はみんな同じなんだな」という思いを非常に強くしたんです。その時から「電子媒体と紙媒体は東大の図書館の両輪であると位置づけて、そのシステム作りとサービスをやろう」と考え始めました。その後、のめり込んだという感じですね。今、のめり込み中です（笑）。

樺山 私は東大の文学部西洋史学研究室に在籍していました。総合図書館から地理的に一番近い研究室なので、ごく間近に見てきたんです。館内に足を踏み入れると、右側の1階と2階に参考図書、リファレンスブックのコーナーがあります。たぶん、日本の国立・公立図書館の中で東大の図書館はリファレンスブックの揃いが一番良いと思います。私はあのコーナーを使うために図書館にごく頻繁



に行っていました。自分で百科事典を何種類も持つわけにはいきませんのでね。これはお金の問題以上にスペースの問題です。ですから、図書館はリファレンスブックを整理して、次々と買い足していく所であってほしいと思います。その意味で恩を感じていますね。今、印刷博物館（凸版印刷）の館長をやっていますが、文字通り「印刷」でして。書物は印刷しなければ成り立ちません。私は「死ぬまで本から離れて暮らせない」ということになりましたね……渡邊さんのお宅にも書物があるでしょう？

渡邊 とても少ないですね（笑）。

樺山 でも、本って、多い少ないは別にしても、自分の周りにあることで安心感とつながるんじゃないかな？

渡邊 そうですね。私は元々、文系でしたから、学生時代に使った『イギリス史』なんて本はいまだにとってありますし、それぞれの先生のお顔とともに覚えています。だけど、私、見事に物を捨てるのが得意なんです。NHKに入局した頃、「秘書課では、まず最初に『有能な秘書は捨てることから始まる』と教わる」と聞きまして（笑）。それでも……作家の方々にお会いして人生をうかがう仕事の時など、その作家の作品を全部読まなければならないことがあります。そんな時は学生時代に教わった「本の読み方やコツ」が役立っていますし、書棚には「その人文庫」が一時的に増えていくんです。

東大の図書館に期待する

渡邊 現在でも、死海文書が出てきたり、日本でも木簡が発見されたりと、「残された記録」は後世の人間にとってかけがえのないものですよね。膨大な書物を東大がどのように受け継いで、文化遺産として残し、かつ、新しい研究に生かしていくか……とても大切なことだと思います。私自身、在学中には、そんなにも貴重な本が東大にあるとは知りませんでした。今後とも卒業生として利用させていただく上で、とても期待しております。

樺山 私もこの大学のOBですが、そうであるからこそ、東大にある本の量、質、その利用条件等について大変強い関心を持つようになりました。東大にいた頃はすぐ近くにあるので「自分のものだ」と思っていたのですが、離れてみると、一市民としては「変えてほしい点」がいくつもあります。これほどのお宝がありますので、大切な資産として社会的にも文

化的にも有効利用するためのお知恵を発揮していただきたいと思います。

西郷 ぜひ頑張っていきたいと思います。

平成18年12月5日

本郷キャンパス内のイタリアンレストラン、『カポ・ペリカーノ』にて

【4ページから11ページの各写真は、総合図書館を訪れた、お三方の様子です】



『カポ・ペリカーノ』での座談会の様子

樺山 紘一 Koichi KABAYAMA

1941年生まれ。1968年 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。1990年 東京大学文学部教授。1995年 大学院人文社会系研究科教授。(97～98年 大学院人文社会系研究科長・文学部長)。2001年 国立西洋美術館長。2002年5月～東京大学名誉教授。2005年10月～印刷博物館館長

渡邊 あゆみ Ayumi WATANABE

1960年生まれ。1982年 東京大学教養学部イギリス科卒業。1982年NHK入局、アナウンス室主任。2006年6月～NHK日本語センター。現在、NHKチーフ・アナウンサー

西郷 和彦 Kazuhiko SAIGO

1946年生まれ。1969年 東京工業大学理工学部化学科卒業。1993年 東京大学工学部教授。1995年 大学院工学系研究科教授。1999年 大学院新領域創成科学研究科教授。2005年4月～附属図書館長。2006年4月～大学院工学系研究科教授



A わかんしゃんほい
和漢写真補遺
南葵文庫
総合図書館所蔵



B けいちちゅうぶず
啓蟄虫譜図
南葵文庫
総合図書館所蔵

東京大学所蔵・
文庫&文献コレクション

紙の至宝—— 知られざる 貴重書の数々

本学の蔵書の特徴のひとつに「貴重書の存在」が挙げられる。脈々と息づく数多の古書、度重なる災害を逃れてきた稀覯本、そして、学者・作家の筆跡を生々と残す「書き込み本」……これらはまさに「紙の至宝」とも呼べるのではないか。

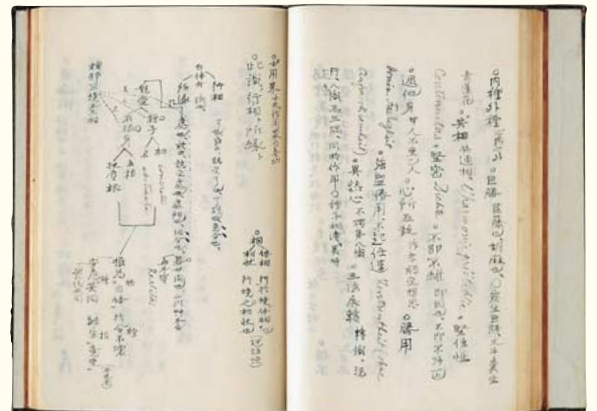
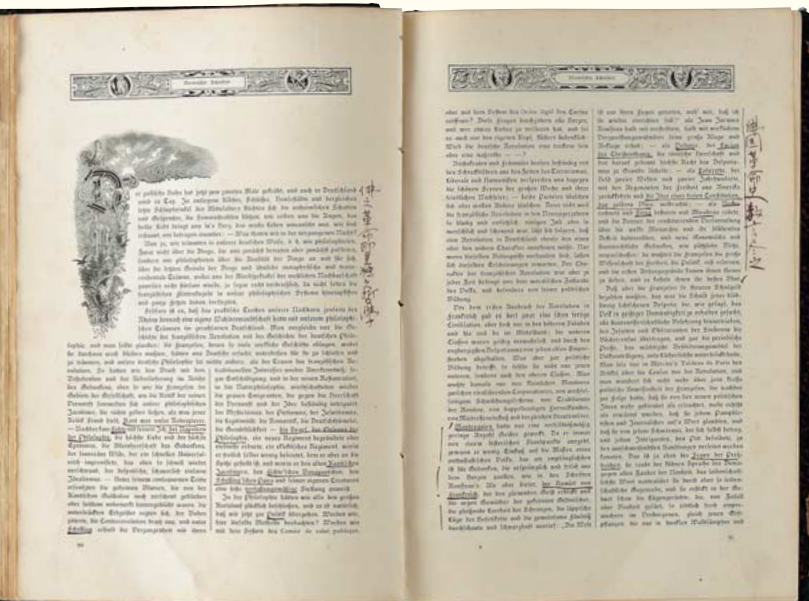


西野嘉章
総合研究博物館 教授

東京大学の誇るべき 文庫・文献コレクション

東京大学は大正12年9月の関東大震災で壊滅的な打撃を蒙った。総合図書館も例外ではなく50万冊とも70万冊とも言われる貴重な蔵書を焼失した。この未曾有の災害の後、欧米各国や国内の篤志家から援助の手が差し伸べられたことは周知の通りである。爾来、東京大学の蔵書はいや増しに膨らみ、どれほどの数に達しているのか。平成17年度末の統計によると全学で850万冊近い数になるという。これに逐次刊行物14万タイトルが加わり総体としては膨大な数になる。この数字

はあくまで図書館学的な統計数値に過ぎない。学内には学術標本に分類される図書類も数多蓄積されており、書籍の総量は容易に把握し難いのが実情である。しかし、確かなこともある。情報のデジタル化が進み、書籍増加率は頭打ち傾向にあるということ。特に医、理、工、農、薬等、理系の学問分野では学会誌等の電子版化が急速に進んでおり、もはや「ペーパー」を保存する必要がない。ということで、施設建物の改修を機に、部局や教室の図書室が閉鎖になるケースが出始めている。加えて、寄贈や寄託の申し出に対する対応も従前通りとは行かなくな



C “Heinrich Heine’s Werke”
Herausg. von Heinrich Laube,
6Bände,Wien, Bensinger.
鷗外文庫 総合図書館所蔵

D ゆいしましろう
唯識鈔
鷗外文庫
総合図書館所蔵

鷗外が愛読したであろう『ハイネ全集』のうちの1冊。鷗外による書き込みがある



E 昔ばなし (雑豆本)
霞亭文庫
総合図書館所蔵
おとぎ話の豆絵本。
〈写真・右〉は豆絵本
を入れておくホルダー。
目盛が付いている写真
は原寸大

92mm



り、蓄積率の低下に拍車をかけている。
とはいえ、本学の蔵書がその量と質の
両面で突出していることは間違いない。
歴史的・学術的に誇るべき文庫を多数有
しているからである。筆頭に挙げるべき
は「南葵文庫」【写真A・B】である。こ
れは紀州徳川家が明治35年に麻布飯倉の
邸内に創設した私設文庫にその起源が遡
る。明治41年に一般公開が始まったこの
私設文庫は関東大震災の折も焼失を免れ
たが、震災の1ヶ月後、当主・徳川頼倫
は文庫の閉鎖を決意し、蔵書のほとんど
が灰燼に帰してしまった東京帝国大学附
属図書館に10万冊近い蔵書を寄贈する。

この文庫は、暦学、天文学、算学、文学、
地理学、民俗学、本草学、軍学、物産学、
洋学など近世諸学全般にわたるもので、
震災後の大学復興の先駆けとして、米國
の富豪ロックフェラーの支援を得て建て
られた総合図書館の中核資料となった。
鷗外森林太郎の遺贈本18,700点も貴重で
ある。『唯識鈔』の自筆稿本、蕪村作『新
花摘』の自筆写本、書入れのある本、創
作の礎となった伝記、歴史、古地図、文
学書の類等、「鷗外文庫」【写真C・D】は
まさに第一級の文化財と言ってよい。一
方、近世の文学・演劇に関する国内有数
のコレクションとして知られる「霞亭文

庫】【写真E・F】は震災後の収書活動の
一環として購入されたものである。新聞
記者を本業とする傍ら、小説や演劇脚本
の創作においても知られる霞亭渡辺勝の
旧蔵書で、浮世草子、洒落本、滑稽本、
読本、黄表紙、浄瑠璃、歌舞伎書等約
1,200点を数える。これらの中には長く
「閲覧不可」「コピー不可」とされてきた艶
本類も含まれる*。同類の文庫として、
他に大野洒竹の収集になる俳書約4,700
点の「洒竹文庫」もある。
『御成敗式目』の版本・写本・註解書約
1,000点のコレクションは法科大学教授・
穂積陳重の収集になる。穂積教授はこれ

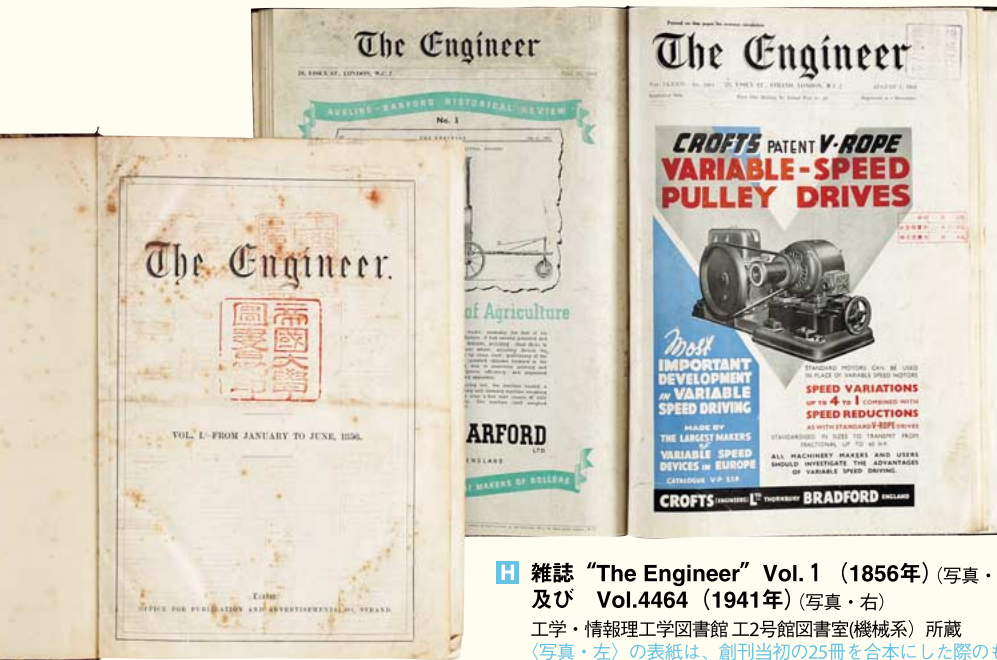


F 天狗のたいり
霞亭文庫
総合図書館所蔵
明暦四年の刊本の写しとされて
いる、胡蝶装の美しい奈良絵本



G Schedel, Hartmann. "Liber chronicarum" Nurnberg, 1493
亀井文庫 総合図書館所蔵
1493年にニュルンベルクで出版されたハルトマン・シェーデルの挿絵本『年代記』

* 編集部註：霞亭文庫は複写紙焼き版が2000年に用意され、
艶本類の閲覧やコピーも可能となっています。



H 雑誌“*The Engineer*” Vol. 1 (1856年) (写真・左) 及び Vol.4464 (1941年) (写真・右)
工学・情報理工学図書館工2号館図書室(機械系) 所蔵
(写真・左)の表紙は、創刊当初の25冊を合本にした際のもの



I 摺拾帖 田中文庫 総合図書館所蔵
稀代の収集家、田中芳男によるチラシヤラベル等のスクラップブック

らの書籍を図書館に入れるにあたり、桐箆笥の架蔵用キャビネットを特別に誂えた。寄贈資料の運用にあたってこの特製キャビネットが役立てられなかったことは、今にして思えば残念至極という他ない。また、安田財閥当主・安田善次郎も藩札コレクション25,000点(経済学部図書館所蔵)を寄贈する際、見事なキャビネットを用意している(こちらのキャビネットは、近年まで使用されていた)。ともあれ総合図書館蔵書で異彩を放っているのは個人の収集になる文庫群である。文庫の価値はその出自の確かさ、全体の纏まりに依存する。収集者の趣味や関心

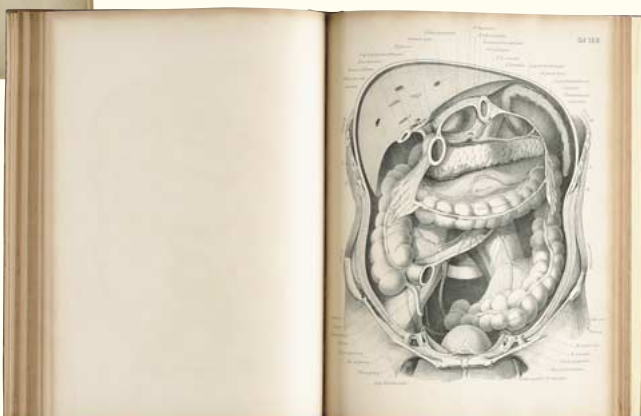
の在処、さらには時代や社会がその収集者に求めていたものが書目に反映しているからである。一例として「亀井文庫」【写真G】を掲げておこう。総数にして2,000点内外。19世紀刊本を中心とする洋書コレクションとしては規模も小さい。しかし、津和野藩主亀井家13代当主茲明がすべて自ら買い集めたもので、その稀少性は際立っている。茲明は西南戦争の始まった明治10年に弱冠17歳で英国へ留学し、ロンドン大学予科で3年を過ごす。帰国後、宮内省御用掛へ奉職し、明治17年に子爵位を授けられた。2年後、侍従試補官の職を辞して再度渡欧。ベルリン

大学で美学美術史を学んだが、その傍らで故国日本の美術工芸振興のための博物館を構想し、日々の生活費を切り詰めながら来たるべき博物館のための書籍等を買集めた。総理大臣の年俸が1万円前後の時代に総額10万円を取書に注ぎ込んだという。1493年にニュルンベルクで出版されたハルトマン・シェーデルの揺籃本『年代記』を始め、アルブレヒト・デュラーの『幾何学教本』ラテン語版(1584年)、ベルナルド・ド・モンフォーコンの『古代図説』5巻10冊(1722年)、ナポレオンの東方遠征の学術的成果を集大成した『エジプト誌』第2版全24巻



J “A Catalogue of Books belonging to Adam Smith” Esqr.1781
アダム・スミス文庫 経済学部図書館所蔵
1781年にアダム・スミス自身が作成させた手稿の蔵書目録

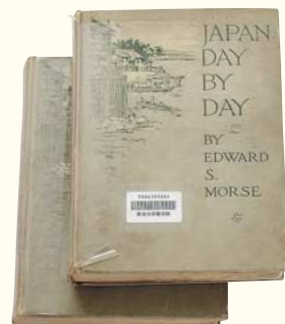
K Wilhelm Henke
(Professor in Tubingen)
“Topographische Anatomie des Menschen Abbildung und Beschreibung:Atlas” Berlin, 1879
ワルダイエル文庫 医学図書館所蔵



本と東大 1 COLUMN

小石川植物園にもあった「植物の貴重書」

貴重書は附属図書館所蔵ばかりとは限らない。中には意外な場所に所蔵されている貴重書もある。たとえば、大学院理学系研究科附属植物園小石川本園。ここには日々収集してきた西洋の博物学関連書と日本の本草学・植物学関連資料を集めた蔵書群がある。洋書ではドドエンス、リンネ、ケンペル、ツェンベルク、シーボルトの主要書目、18世紀以降の重要にして豪華な博物図譜類、和書では松岡玄達、平賀源内、小野蘭山、飯沼慾齋、水谷豊文、岩崎灌園、伊藤圭介等、近世から近代にかけて活躍した本草諸家の主著の多くが含まれる。未だ公開されざる植物原画稿も多く、その包括性と網羅性の点で世界的に稀なものと言える。植物園に生息する、植物の貴重書。これもまた「本と東大」の関係のひとつなのだ。



L (写真・上)
Morse, E.S.
"Japan Day by Day"
1917年初版
理学部生物学科図書室所蔵
(写真・左)
1917年初刷の鉛板、および、
Vol. 1の木箱No. 8, 10
モース文庫
総合図書館所蔵

(1821-29年)、パリの書肆ディドが出版したジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージの建築雑纂全29巻20冊(1835-39年)等、出版史を画する大型稀覯本他、美術工芸の実技書や通交本の書目の総体に、日本の近代国家建設に貢献しようとする若き青年華族の熱い想いが結晶している。幕末～明治初期の日欧交渉に関する資料としては、内国勧業博覧会、万国博覧会、博物学の関係書6,000点を集めた「田中芳明文庫」【写真I・M】がある。理学部の御雇い外国人教師で大森貝塚の発見者、エドワード・S・モースの旧蔵書で、遺族から贈られた日本関係・自然

科学関連書1,200点のコレクションも面白い。この中にはモースの日本滞在記録として知られる『Japan Day by Day (日本その日その日)』(1917年)の印刷に使われた鉛板一揃い【写真L】という珍品も含まれている。その他、17世紀フランスの政治史関連資料2,800点を集めた「マザリナード集成」、河口慧海らの収集したサンスクリット語仏教写本約500点とチベット大蔵経232包のコレクションもある。ダンテ著作の挿絵本『神曲』(1481年)、マルチン・ルター著作の初版本、見事な挿図のシーボルト著作『日本誌』全7巻(1852年)、英国政府から贈られ

たケルムスコット・プレス製作『ジョーサー著作集』(1896年)等、歴史的に知られた稀覯書類も総合図書館の宝である。

学内の他部局にも有力な蔵書が存在する。工学・情報理工学図書館の工2号館図書室には、安政3年(1856年)の創刊から昭和16年(1941年)まで通号4,464号を数える最古の機械系専門誌『エンジニア』の一揃い【写真H】、御雇い外国人教師、チャールズ・D・ウェストの講義録や明治7年(1875年)のノート等の資料体が残されている。また、経済学部図書館には、新渡戸稲造が1920年にロンドンで入手し、「経済学者の宝物と申すべ

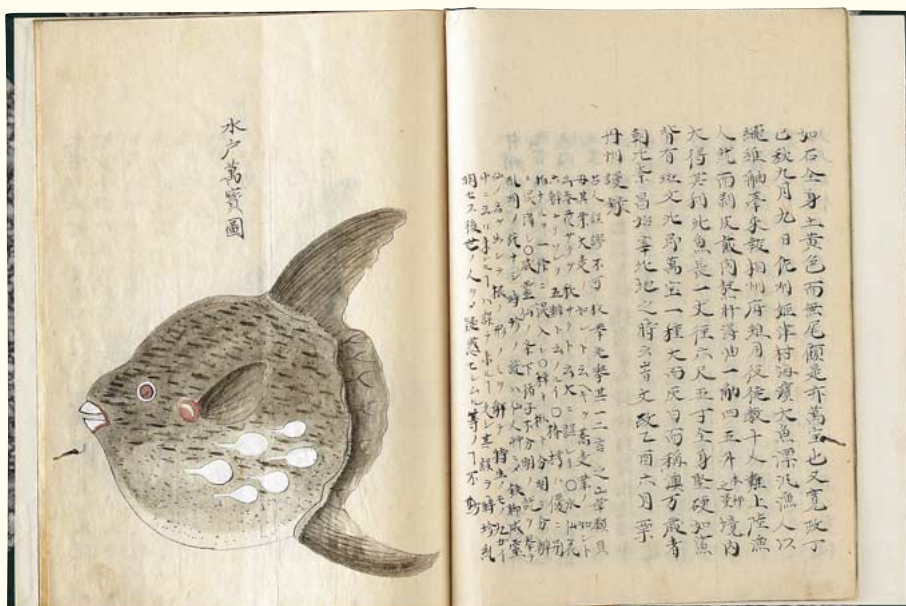


1



2

1. 本草図譜(小石川植物園で作られた写本) <岩崎瀧園著・1828年完成>
2. Micrographia <Robert Hooke著・1665年刊行>



M ほんしゃこう
翻車考
田中文庫
総合図書館所蔵



N へいほうゆうかんしょう
兵法雄鑑抄
 卷第三十～卷第五十二
 藤原有常 天保14年
 (1843) 11月
 大類伸文庫
 総合研究博物館所蔵
 北条流兵法学の祖である北条氏長が正保2年(1645)に著した兵法書『兵法雄鑑』の一部を書写し、傍注あるいは頭注・脚注として解説を加えたもの。『兵法雄鑑』は全54巻からなり、徳川三代将軍家光に献上され、講義に利用されたという

きもの」(同年7月23日付書簡)として本学に寄贈した経済学者アダム・スミス蔵書約140種300点のコレクション【写真J】がある。関東大震災で研究室が全焼した際に、教職員や学生達が搬出して危うく焼失を免れたと言われるものがそれである。「スミスが知見を広め、思想を練り、又その独居の幽情を慰むる友」(山崎覚次郎)とされる書籍類で、1781年にスミス自身が作成させた蔵書目録(手稿)を含む。医学図書館には解剖学他に関する西洋古刊本2,000点を集めた「ワルダイエル文庫」【写真K】が、人文社会系研究科には約300点の「ラフカディオ・ハー

ン文庫」と家伝の書籍3,500点を集めた「本居宣長文庫」が、史料編纂所には薩摩藩関連古文書17,000点を集めた「島津家文庫」(国宝)【写真P】が、法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター(明治新聞雑誌文庫)には吉野作造の遺贈品8,700点の「吉野作造文庫」、明治・大正・昭和を生きた稀代の出版人宮武外骨の収集品が、それぞれ残されている。

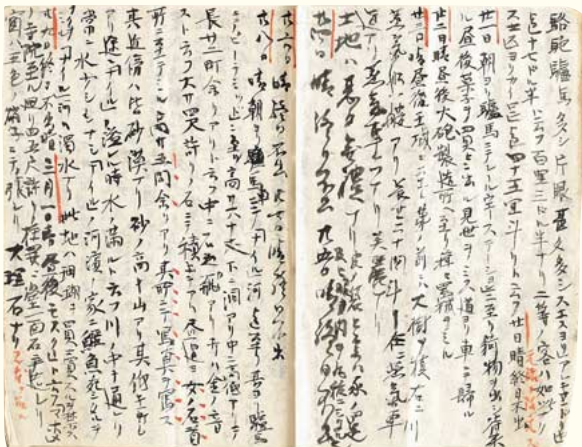
また、総合研究博物館本館には伊能忠敬の8冊組『大日本沿海輿地全図』(関東部のみデジタル復元)他の「山崎直方地図コレクション」がある。他に軍学・城郭史関連の古刊本・稿本を集めた「大類



P 江戸大地震之図
 国宝 島津家文庫 史料編纂所所蔵

伸文庫」【写真N】、ユーラシア文化史の「江上波夫文庫」、西アジア考古学の「深井晋司文庫」、植物分類学の「大場秀章文庫」等があり、小石川分館には、徳川幕府遣欧使節に弱冠17歳で加わり、後に医家として大成した三宅秀の日記を含む「三宅家文庫」【写真O】、文化財保存・行政の実施と東アジアの考古・建築史で貢献のあった「関野貞文庫」がある。

いずれにせよ、ここに紹介したものは東京大学が誇るべき数多の文庫のごく一部に過ぎない。現在の私の職場である総合研究博物館においてもそうであるが、図書資料にせよ学術標本にせよ、ただ保



O よーろっばへへのにっき
欧羅巴エノ日記
 三宅秀 文久3年(1863)12月27日～元治元年(1864)7月20日
 三宅家文庫 総合研究博物館小石川分館所蔵

三宅秀(1848-1938)が幕府遣欧使節団に随行した際の日記。縦14cm×横10cm。中央縦方向に折り目がついており、道中半分に折って懐中していたのであろう。「ピラミッド」を見物したことなどが記されている

本と東大
2
COLUMN

反骨精神と明治文化を今に伝える「明治新聞雑誌文庫」

「近代日本法政史料センター(明治新聞雑誌文庫)」は法学部内の図書室のひとつ。明治大正期の新聞雑誌等を収蔵し、研究・教育のために公開している。新聞雑誌文庫としては日本最古、明治大正期のものとしては日本最大。実はこの文庫、東大の図書施設の中では、ずば抜けてユニークな施設なのだ。それは民本主義者・吉野作造と反骨ジャーナリスト・宮武外骨の個人的収集物を当初の所蔵資料として創設されたからである。特に宮武提供の資料には『スコブル』、『滑稽新聞』等、辛口ギャグで政府を痛烈批判した宮武本人編集の雑誌が含まれている。宮武は初代事務主任として、全国の貴重資料集めに奔走した。現在もこのちいさな文庫には反骨精神と明治文化が息づいている。



安政2年(1855)10月2日の夜、江戸を襲った直下型地震の被害と復旧過程を描いた「安政江戸大地震絵巻」の一部

存のことだけを考えればよいというものでもない。今日の研究ニーズに応えるかたちで活用がはかられてこそ、学術財としての存在意義があるのだから。デジタル・アーカイヴ化の推進は、そのためのひとつの方途であるが、それで事足りるわけではない。あくまでひとつの方途に過ぎない、そのように大学博物館的な立場から、あえて言いたいと思う。モノとしての書物の存在様態を、そのまま広汎な人々の眼前にパノラマとして提示できるような、収蔵展示型のオープンな稀観書収蔵庫を大学として持つべき時代が来ているのではなかろうか。



1. 明治新聞雑誌文庫の玄関。屋外の半地下になっている
2. 吉野作造の旧蔵書『万国公法』(西周助訳・1868年刊)
3. 宮武外骨編集の雑誌『滑稽新聞』自殺号(1909年刊)
4. 宮武が自署に用いていた「外骨マーク」

主な文庫・コレクション

	文庫名	数量	内容
総合図書館	鷗外文庫	18,700	森鷗外の旧蔵書。日本の歴史や文学などを中心に、伝記、江戸古地図等のほか、ドイツ留学中に収集したと思われる洋書など。 http://rarebook.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/ogai/
	霞亭文庫	1,851	明治・大正期の小説家、渡辺霞亭が収集した江戸時代の小説類と演劇書。 http://kateibunko.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/katei/
	亀井文庫	1,958	旧津和野藩主の家柄である亀井茲明が19世紀末のドイツ留学中に収集した西洋美術関係の洋書。
	鶉軒文庫	4,618	医学部教授であった土肥慶蔵(鶉軒)旧蔵書の中の和漢医学書。
	洒竹文庫 竹冷文庫 知十文庫	6,577	明治から昭和にかけての俳人であった大野洒竹、角田竹冷、岡野知十が各々収集した連歌俳諧書。
	青洲文庫	25,000	甲州の素封家であった渡辺家の寿、信(青洲)、沢次郎の三代にわたる、主に漢籍・国文学関係書からなる旧蔵書。伊藤博文の筆による額あり。
	田中芳英文庫	6,000	日本博物学の草分けの1人、田中芳男の収集した博物学及び博覧会関係資料。
	南葵文庫	96,000	紀州徳川家の旧蔵書で、南葵文庫自体が様々な個人文庫の集積でもある。徳川最後の将軍慶喜の筆による額あり。
	モース文庫	1,200	明治初期のお雇い外国人モース(Edward S. Morse)から送られた日本関係及び自然科学関係の資料。
	法学部	宮武外骨関係資料	
吉野文庫		8,716	大正期の政治学者で法学部教授であった吉野作造の旧蔵書。
医学部	フルダイエル文庫	約2,000	ドイツの解剖学者フルダイエル(Wilhelm von Waldeyer-Hartz)の旧蔵書。主に解剖学関係の著書・文献、動物学・人類学関係書など。
文学部	市河文庫	約1,200	文学部教授であった市河三喜旧蔵の19世紀末～20世紀初頭の英語学・言語学関係論文。
	ハーン文庫	303	市河三喜旧蔵の小泉八雲(Lafcadio Hearn)の著作・訳書・研究書及び雑誌記事等。
	本居文庫	3,534	本居宣長及びその子孫・門下の自筆本・写本。
経済学部	アダム・スミス文庫	314	アダム・スミス(Adam Smith)の旧蔵書。
	エンゲル文庫	1,160	ドイツの統計学者エンゲル(Ernst Engel)の旧蔵書。
教養学部	狩野文庫		旧制第一高等学校長である狩野亨吉の日記・来翰など。
	木谷文庫	228	演劇・浄瑠璃研究家木谷蓬吟旧蔵の幕末・明治の浄瑠璃関係史料。
情報学環	小野文庫	1,144	前身である新聞研究所の実質的な創設者小野秀雄が収集したかわら版、新聞錦絵、号外など。 http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/pblc-achv/digital_archive/ono_collection/contents/index.html
東洋文化研究所	大木文庫	3,168部	北京在留の弁護士であった大木幹一より寄贈された中国法制関係資料。
	雙紅堂文庫	3,000	書誌学者長澤規矩也旧蔵の明清時代の戯曲・小説類。
	ダイバー・コレクション	367	ダイバー(Hans Daiber)収集のイスラーム世界の伝統的文化全般に関わる写本コレクション。
社会科学研究所	糸井文庫	10,500	東京職業紹介所長などを務めた糸井謹治の収集による日本労働事情関係資料。 http://library.iss.u-tokyo.ac.jp/collection/itoi.html
	極東軍事裁判記録	454	極東軍事裁判の公判、弁護関係資料。
	ドイツ労働総同盟(DGB)旧蔵文庫	7,000	DGB旧蔵の1900年初頭から1970年代に至る資料。 http://library.iss.u-tokyo.ac.jp/collection/dgb.html
史料編纂所	島津家文書	約17,000	平安時代より江戸時代に至る薩摩藩島津家伝来の文書群。国宝に指定。
	宗家史料	約2,900	対馬宗家の江戸藩邸に伝来した史料。
	徳大寺家史料	約4,400	旧公卿徳大寺家伝来の公家史料。
	益田家文庫	約7,600	石見の豪族益田家中世以来の史料。

(2007年2月現在)

※亀井文庫、鶉軒文庫、田中文庫、南葵文庫、モース文庫の5つに関しては以下のURLをご参照ください。
マルチメディア展示会 <http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/koho/tenjikai/>



保立道久史料編纂所長と渡邊あゆみさん。1,000冊を超える史料編纂所出版史料集の前で

史料編纂所

収集と編纂—— 歴史情報を編み上げる 果てしない作業

百年以上も昔から史料の「収集と編纂」を続けている史料編纂所。ここでは、集められた史料から着々と新たなコンテンツが編み上げられてきた。

1,000冊を超えるその編纂物は、日本史研究者にとって、貴重な研究資源なのだ。

史料編纂所
を訪ねて
渡邊あゆみ
NHK
チーフ・アナウンサー



在学中には存在も知らなかった研究所が東大にはたくさんあるのですが、その1つが『史料編纂所』です。まず、『大日本史料』の書棚の前でその膨大な内容に驚き、「予定の12編まで刊行するにはあと何百年かかるのか判らない」と宮崎勝美教授に言われて、担当者の熱意に敬服しました。

驚くのはまだ早く、上階に案内されると、そこは特別収蔵庫。国宝指定された島津家文書の眠る部屋です。1587年に送られた豊臣秀吉朱印状など貴重な資料を拝見していると、



その奥に黒塗塗の島津家文書箱が鎮座。西南戦争の折に家臣が命を賭けて城から運び出したからこそ、国宝級の文書が残ったと聞きました。歴史的な遺産が人間の寿命をはるかに



宮崎勝美
史料編纂所 教授
副所長

史料編纂所の史料収集と 編纂・データベース

史料編纂所は、古代から明治維新に到る日本史史料の研究・編纂を中心事業とする研究所です。その淵源は、1793（寛政5）年に国学者塙保己一が江戸幕府の援助を受けて開設した和学講談所にさかのぼります。1869（明治2）年、明治政府によって開設された史料編輯国史校正局がその事業を引継ぎ、その後1888（明治21）年国史料創設に伴って帝国大学に移管されました。史料編纂所という現在の名称になったのは1929（昭和4）年のことです。

その間、研究・編纂の基礎となる史料の収集は1885（明治18）年から本格的に始められました。“収集”といっても、史料原本そのものを集めて来るわけではなく、影写（敷き写し）・謄写（見取り写し）・模写（絵画史料の写し）といった技法により写し（複本）を作成して、研究・編纂に使う方法が採られました。第2次大戦後はマイクロフィルムによる写真撮影が中心となり、現在では毎年約10万コマの出張撮影が行われています。

100年以上にわたるこうした収集活動の結果、10万点余りの複本が作成されま

した。また長い経過の中で、史料所蔵者からの寄贈を含め、多くの原本も蓄積されて来ました。現在では国宝1件（島津家文書）・重要文化財13件をはじめ、20万点近くの貴重史料が書庫に収められています。史料編纂所の図書室は、いわゆる「図書」（活字本）よりもそれらの「史料」を数多く所蔵し、研究・編纂事業だけでなく所外・学外の日本史研究者に広く公開利用されているのが大きな特徴です。

史料編纂所は1901（明治34）年以来、これら多数の収集史料をもとにして史料集の編纂・刊行を行って来ました。『大日本史料』・『大日本古文書』などの書目名で刊行された基幹的史料集は、総計1,000冊を超えています。また1980年代以降、その成果を歴史情報データベースとして組み立て直す事業を新たに行っています。現在公開されているデータベースは25種類に及び（次頁参照）、所外からのアクセス数は多い時で月190万件台に達しています。100年以上続けて来た紙媒体による史料集の編纂・刊行と、データベースという新しい形態による歴史情報の提供は、今後史料編纂所の事業の両輪として位置づけられていくことでしょう。

史料編纂所出版史料集

大日本史料	380冊
史料総覧	17冊
大日本古文書	217冊
大日本古記録	116冊
大日本近世史料	127冊
大日本維新史料	43冊
日本関係海外史料	38冊
正倉院文書目録	5冊
日本荘園絵図聚影	7冊
花押かがみ	6冊
その他合わせて	1,000冊以上

（2005年度まで）

主な所蔵史料・図書

図書（版本を含む）	168,254冊
うち和漢書	161,943冊
洋書	6,311冊
史料（原本・写本類） （国宝1件、重要文化財13件を含む）	195,410点
史料（史料編纂所作成複本）	110,329点
うち影写本	7,105冊
影写本（複製本）	4,436冊
謄写本	22,705冊
写真帳	39,388冊
台紙付写真	23,222冊
模写・拓本	3,589点
稿本	9,845冊
模造	32点
古写真	7点
逐次刊行物	2,703種
うち和雑誌	2,505種
洋雑誌	198種
フィルム類	64,242点
うちマイクロフィルム	48,018リール
シートフィルム	7,224タイトル
ガラス乾板	9,000枚
電子出版物（ビデオテープを含む）	714タイトル

（2006年3月31日現在）

超えて生き残るのは、守った人がいるからだという至極当たり前のことに改めて感動を覚えたのです。

続いて古文書の保存・修復作業を見学する

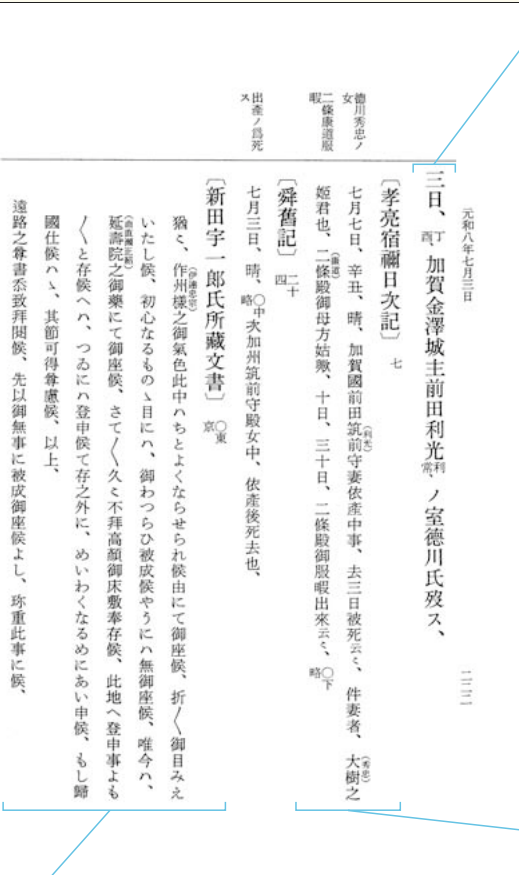


ため階下の史料保存技術室へ。そこで出会ったのは恐ろしく気が長い職人集団でした。虫食いだらけのボロボロの和紙をピンセットではがしたり貼ったりと「ジグソーパズルと障子貼りの」作業に終日専念する中藤・高島・山口チーム。原本を毛筆影写する和田さんは大学で書道教育を専攻したそうですが、教壇には立たず古文書に向かう日々。何度も練習を繰り返した後、影写本番に臨む時には「真剣影写中」の札を掲げます。誰も寄せ付けない気迫はまさに原本筆者との真剣勝負。鬼籍



に入った筆者の息遣いすら甦ります。その向い側には史料保存技術室の紅一点、村岡さんが絵画史料を模写していました。原本が消えかかっていて重ねた和紙に透けて見えない時

編年体史料集『大日本史料』の1ページ



網文

年月日を追って編纂されている編年体史料集『大日本史料』は、その日に関係する事件や出来事を簡潔にまとめた「網文」という文章からまず始まります。図版の網文は、「元和8年（1622）7月3日、3代加賀藩主前田利常の正室が亡くなった」というものです。こうした網文は、過去100年以上にわたる研究・編纂の過程で約30万件作成されており、現在ではそれらがすべてデータベース化されています。『大日本史料』が編纂対象とした9世紀末から明治維新期まで前後約1,000年にわたる期間の、きわめて詳細かつ膨大な年表データベースとすることができます。



編年史料網文データベース検索画面

引用史料その1「孝亮宿禰日記記」

網文の事実を裏付ける史料が次々に引用されます。この史料は、公家の壬生孝亮の日記「孝亮宿禰日記記」の一節です。前田利常の正室は金沢で亡くなりましたが、京都にいた壬生孝亮は4日後にそのことを伝え聞いて日記に書き留めています。この史料は宮内庁書陵部に所蔵されており、史料編纂所ではそれをマイクロフィルムで撮影し、写真帳にして研究・編纂に利用するほか、閲覧にも供しています。史料編纂所にはこうした写真帳が3万冊以上収められています。



引用史料その2「新田宇一郎氏所蔵文書」

仙台藩伊達家の家臣の書状の中にも前田利常正室の死去に関する記事が含まれていました。この史料は「新田宇一郎氏所蔵文書」という影写本に収められています。影写本は、史料の写真撮影が一般化する以前の明治初年から全国

各地の史料を収集するために多数作成されました。現在史料編纂所には7,100冊余りの影写本が所蔵されており、そのうち所蔵者の許可を得られたものについてはインターネット上で画像が公開されています。



影写本画像表示画面

史料編纂所の史料収集と編纂・データベース

史料編纂所では、史料編纂の効率化を図るため、また出来上がった史料集をより便利に利用したり、所蔵史料の公開利用を促進するため、様々なデータベースを作成してきました。現在ウェブ公開 (<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>) しているものは、所蔵史料の目録情報、日本史上のできごとを網羅した詳細な年表、史料に記されている人名・地名・事項名などの索引、日記や古文書などの全文情報、肖像画や錦絵など絵画史料の画像情報など25種類に及びます。



模写・徳川家康画像 (原本寛永寺所蔵)

公開中のデータベース

所蔵史料目録DB	大日本史料索引IDB
古文書目録DB	中世記録人名索引IDB
大日本史料総合DB	花押カードDB
古記録フルテキストDB	歴史絵引IDB
古文書フルテキストDB	肖像情報DB
奈良時代古文書フルテキストDB	史料編纂所所蔵肖像画模本DB
平安遺文フルテキストDB	史料編纂所所蔵荘園絵図模本DB
鎌倉遺文フルテキストDB	摺物DB
編年史料網文DB	錦絵DB
近世編年DB	古写真DB
維新史料綱要DB	応答型翻訳支援システムDB
近世史編纂支援DB	電子くずし字典DB



には、重ねては外し重ねては外しの作業を素早く繰り返し、「残像」を利用して模写するのだそうです。大学では日本画を専攻された村岡さん。手弱女のタフな精神力に敬服しま

した。写真室では谷・中村両氏が翌日からの鳥取出張探訪に備えて撮影機材の整備に追われていました。史料写真撮影に加え、顕微鏡や赤外線デジタルカメラの使用で紙質分析までも可能になったのだそうです。写真室は2008年に100周年を迎えるとのこと。こんな地味、いや地道な作業を100年も続けてきたのです。

コンピュータ全盛の時代でも、史料編纂所を支えているのは、気の遠くなるような作業に真正面から取り組み、己の才能を史料に投

影させながら、歴史的遺産を未来に受け継ぐことに情熱を注ぐ「人」たちでした。強くて温かい人の手を経るからこそ、世界に誇れる日本の史料が守り伝えられているのです。



本と東大 3 COLUMN

図書担当者の永遠の戦い 「文学部カビ燻蒸奮闘記」

本は時間経過とともに汚れる。そして、傷む。その原因の多くは虫とカビ。特にカビは人体にも害を与える。本のカビを吸い込んで肺炎になることもあるのだ。だから膨大な書籍を抱える東大にとってカビ対策は深刻な問題だ。学内各図書館（室）の図書職員は皆、頭を悩ませている。

カビ対策は、単に除湿機を回すだけでは有効ではない。その前にすべてのカビを根絶しておかなければすぐに再発生してしまうからだ。カビ根絶には「薬剤による燻蒸」が一番の手段なのだが、昨今ではその燻蒸剤の人体への影響も叫ばれている。そのため、カビ対策はきわめて難しい問題となっている。そこで、昨年大がかりな「カビの燻蒸」を行なった文学部に赴き、陣頭指揮を執った風巻みどり文学部図書室主査にお話をうかがった。

「最初はひとつの研究室から、ひどいカビ本が発見されたんです。それで一昨年11月にその研究室だけ燻蒸を行いました。ところが、その後、次々に各研究室からカビが発見されて……」

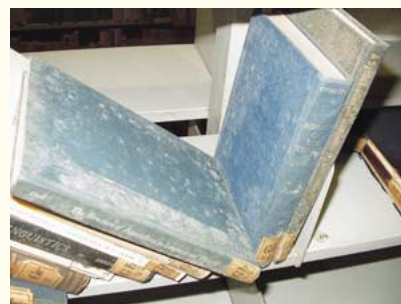
結局、11研究室（全研究室数の1/3）でひどいカビ本が発見される。かくして「文学部カビ燻蒸作戦」は昨年8月11日～17日に大々的に実行されたのであった。お盆を選んだのは構内に人が少ない時期だからだ。人体に影響

を与える燻蒸ガスの取り扱いには細心の注意を必要とするため、燻蒸現場の周囲に人が少ないほうが良い。しかしながら、燻蒸ガスの毒性は時間とともに消える。そこで、7日間のうち、実際に燻蒸を行なうのは3日目だけとし、1～2日目は「準備」に、4～7日目は「ガス抜き」の期間に充てた。

「その『準備』が大変でした。法文1号館書庫、法文2号館書庫、文学部3号館書庫に燻蒸場所を限定して、文学部全体のカビ本を搬入しました。終了したら元に戻すわけですね。燻蒸場所を限定したのは、燻蒸薬剤の漏れを防ぐために、建物全体を立ち入り禁止にしなければならなかったからです」

東大の建物は立派だが、古い。だから、ガスが漏れないように書庫全体を密閉し、建物を立ち入り禁止にしたのである。お盆とはいえ、構内から完全に人がいなくなるわけではないので、風巻さんは気が気ではなかったにちがいない。

結局、「文学部カビ燻蒸作戦」は無事完了した。以後は燻蒸直前に設置した67台の除湿機によりカビ再発生はほぼ見られないという。「本のカビは飛んできた孢子によって、すぐに再発生します。ですから常に除湿してカビの繁殖を抑える必要があります。また、文学部に新たに入って来る書籍の中にはカビの生



燻蒸とは？

薬剤でいぶして殺虫・殺菌等を行なうことを燻蒸と言います。室内を密閉して薬剤を充満させ、一定時間おくことにより効果を発揮します。家庭用燻蒸剤はゴキブリ・ダニ退治等に使われています。

えた古書も多数ありますので、消毒用エタノールで丹念にカビを拭き取っています」と風巻さん。

図書担当者にとってカビ対策は、「永遠の戦い」と言えるのかもしれない。

本と東大 4 COLUMN

立て置きか? 平積みか? 和装本の保管のお話

近世以前、和装本は平積みにして保管するのが普通であった。また、書目を見分けるために下小口（したごぐち・本の底の部分）に題名・著者名等を書き込むこともよくあった。何らかの補強をしない限り、柔らかい和装本を立てて保管すると歪みやすくなる（薄い雑誌をファイリングせずに立てて保管する時に似ている）。だから、平積みになっていたのかもしれない。

しかしながら、現在の図書館の書架には本が「立て置き」で保管されている。これは洋装本に限らず、和装本にも当てはまる。和装本を「立て置き」している図書館では、書目



本学の史料編纂所では、一部の和装本が「平積み」にされている。写真は島津家文書のうち「神社調」。薩摩藩が領内の神社の由来を神社ごとに書き上げたものである

単位で帙（ちつ）に収めたり、1冊ずつサイズを合わせて作った保存箱（アーカイバルボックス）に収めて保管したりしているケースもあるようだ。

立て置きか? 平積みか? 一口に「本の保管法」と言っても、時代時代によって変遷を遂げてきているのである。

東京大学電子ジャーナル事情

学術の世界に広がる「電子化」の波

インターネットの出現により、私達の生活はドラスティックに変わりつつある。

その変化は書籍・文献にも及び始めている。

「電子化」の波は急速に学術の世界に広がっていく。



高増 潔

大学院工学系研究科 教授

現在、特に学術の世界では、書籍や雑誌の電子化が急速に拡大しつつある。ここでは、理科系の本学教員から見た「最近の電子ジャーナルの利用状況とその問題点」について説明したい。

電子ジャーナルの利用方法

画面1は、学生のネットによる情報収集の教育などに使いやすいように、情報基盤センターが提供している学習ツール「ネットでアカデミック」である。このツールを利用することで、電子ジャーナ

ルなどの利用の仕方を簡単に学習することができる。従来の「輪講」という科目では、教員が読むべき文献を用意し、教員が設定したテーマに従って、図書館で学生が文献を探してから、実際に文献を読み、発表する手順で行われていた。現在では、学生は、まず電子ジャーナルの検索方法を学習し、教員のテーマに従って必要な電子ジャーナルを全てネットワーク上で手に入れることができる。

画面2と画面3は、電子ジャーナルを検索している例である。画面2は検索条件の設定の例であるが、実際はもっと複雑なキーワードや、著者、雑誌などの条件が設定できる。このような条件で、電子ジャーナルのデータベースを検索する

と、画面3のような条件にあった論文リストが表示される。これらの論文の大部分は、フルテキストがPDFファイルなどの形でネットワーク上において閲覧可能である。必要な論文のフルテキストをダウンロードすれば、自分のパーソナルコンピュータ上で、論文を読むことができ、発表用の資料などを作る手間も少なくなる。このように、教員も学生も、従来、図書館等で行っていた文献の検索や文献をコピーする作業が、すべてネットワーク上で行うことが可能になった。

東大における電子ジャーナル

東京大学においては、図書館によって電子ジャーナルへの対応が行われている。現在*約5万タイトルの雑誌が、電子ジャーナルで出版されているが、このうち、東京大学では約3万タイトルの電子ジャーナルを読むことができる。図1は東京大学における電子ジャーナルの利用回数で、2004年には約135万回利用され、非常に多くの利用があることが分かる。図2は、外国雑誌の印刷版と電子ジャーナルの購読状況の推移である。従来は冊子

* Ulrich's Periodicals Directoryによる

本と東大

学生生活実態調査に見る「本と東大生」の今昔

「大学生が本を読まない」と言われるようになって久しいが、書物の国の住人、東大生はどのように本と関わっているのか？

東京大学学生生活実態調査の結果にある「蔵書数201冊以上の者の割合」を約10年ごとに見てみると、右の表ようになる。1979年が58%、1989年が33.4%、2000年がなんと、15.8%! このデータだけを見ると、東大生もかなり本離れしているように思えるが、実は別のデータでは違う傾向が表れている。「4月から調査月（11月～12月）までの期間の読書冊数平均」の調査結果を見ると、79年が36.4冊、89年が34.2冊、00年が39.1冊となっていて、現在までの二十数年間、東大生の読書量はあまり変わらない状態が続いているのだ。読む量はあまり変わらないの持っている量ははっきりと減り続けている……いず

れのデータも平均値なので明確に言い切ることにはできないが、この結果は東大生の「モノとしての本」への愛着が薄れてきていることを示しているように思える。この特集の座談会で「学内図書施設等の蔵書量が増えすぎて所蔵スペースが足りない」という問題が挙げられていることを考えると、学生と教員では「本に対する愛着」において、かなりのギャップが生まれつつあるのではないだろうか。

ちなみに、「好きな著者・作家」のデータは右の表の通り。79年の第2位にドストエフスキーが入っているが、この頃はまだ、翻訳された外国文学を読んで教養を積もうとする姿勢が多く、東大生に見られたということなのかもしれない。また、90年代以降、「夏目・村上・司馬」の三氏がダントツ人気を誇っている。特にすごいのが夏目漱石。（このデー

東大生全体における蔵書数 201 冊以上の者の割合

1979年（学部男子）	58%
1989年（学部男子）	33.4%
2000年（学部男子・女子）	15.8%

東大生が好きな作家

1979年	1位：夏目漱石 2位：ドストエフスキー 3位：筒井康隆
1989年	1位：夏目漱石 2位：司馬遼太郎 3位：村上春樹
2000年	1位：村上春樹 2位：司馬遼太郎 3位：夏目漱石

東京大学・学生生活実態調査より

タでみる限り、) 20年もの間、ベスト3の常連になっている。他大学のデータではどうなのか分からないが、東大に限っていうならば、さすが、文豪の影響力は21世紀でも絶大というところか。

で購入していた外国雑誌が、電子ジャーナルへと急速に移行しているのが分かる。また、電子ジャーナルの購読額は年々増加している。

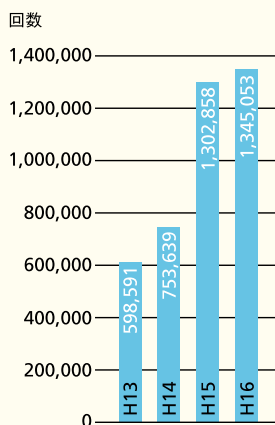
問題点について

以上のように、学生にとっても教員にとっても電子ジャーナルは不可欠の共通インフラとなっている。しかし、電子ジャーナルの購読額をどのようにして維持していくかは大きな問題であり、部局単位ではなく、東京大学全体として予算の共通化を含めた対応を行っている。また、論文の検索がデータベースにより便利になった反面、論文誌を図書館でじっくり読むことにより関連する近い分野の情報に触れる機会がなくなり、検索のキーワードだけに依存し、非常に狭い視野で研究領域を捉えることも指摘されている。

電子ジャーナルに対しては、その便利さを生かしながら、予算の対応、今後の情報検索の方法を教育面、研究面でより優れた方法にしていく必要がある。



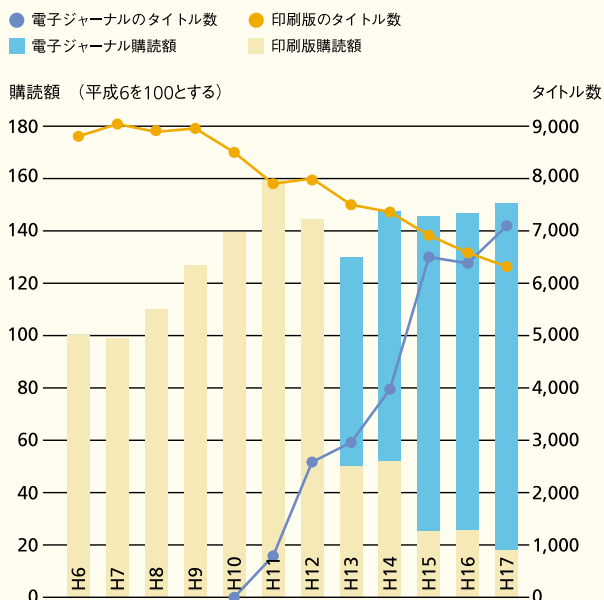
【図1】電子ジャーナル利用回数



【画面1】ネットでアカデミック on Web
【画面2】電子ジャーナルの検索画面の例：AuthorがKOMIYAMA HIROSHI、Journal article（雑誌論文）、Theoretical（理論的）、English（英語）、2000年～2007年の論文を検索している
【画面3】画面2の検索結果：該当する論文のリストが表示される

【図2】外国雑誌は急速に電子ジャーナルへ移行しつつある

印刷版と電子ジャーナル購読状況の推移 (外国雑誌前金一括購入分)



※図1、図2：「図書館の窓」 vol.44 No.5 (2005.11)より

本と東大 6 COLUMN

東大の知を世に送り出す出版社 「東京大学出版会」

東京大学出版会（以下、出版会）は主に本学の学術成果を世に送り出すために作られた国立大学初の「大学出版部」である。設立は1951年。英米の各有名大学出版局をモデルに設立されたが、英米の大学出版局が「大学の一部局」であるのに対して、出版会は本学から独立した財団法人となっている。独立組織だから国の資金援助は得られない。当然、「売れる本」を出さなければ倒産してしまう。いわば、歴とした「出版社」なのだ。

出版社だから、しっかりヒットも飛ばしている。ここ十数年間でのヒットと言えば、『知の技法』（小林康夫・船曳建夫編 1994年刊）と『教養のためのブックガイド』（小林康夫・山本泰編 2005年刊）。ともに本学教員が編者・著者となっている本である。この両書、実は本学構内の生協書籍購買部よりも、市井

の書店で火がついたためにヒットとなった。知的興味を持つ読者層が作り出したヒットだと言えるわけだ。さらに、出版会の主力商品となっているのは「大学の教科書」。他大学での使用も想定して作っているため、「教科書」の売上が売上全体の4割を占めるとのこと。

しかしながら出版会の本額は学術書だ。過去の刊行書籍点数は6,000点以上。本学教員・本学出身者が関わった書籍は80%を超える。学術書は一般書と比べて売上が低いようだ。「学界の評価は高いのに売れなかった本」を3回続けて出すと、その分野の本は出しにくくなるなどと業界では言われ



写真左／月刊「UP (University Pressの略)」。学問をめぐるエッセイ・小論等を掲載。写真右／『教養のためのブックガイド』小林康夫・山本泰編 2005年刊。本学の教員が様々な教養書を紹介している

ているという。独立採算は大変である。

本学法人化後、企画の多様が高まったという。学内の学術映像のDVD全12巻や学内風景写真のポストカード等を刊行している。今や、出版会は学術情報発信だけでなく学内コンテンツ発信基地に変わりつつあるのだ。

柏図書館

未来型図書館サービスが大学を変える

あらゆるサービスは人々のニーズに答えて進化を遂げるものだ。図書館サービスもまた、同様。

柏図書館は、私達の脳裏に鮮やかな「近未来の図書館像」を浮かび上がらせてくれる。



合田美恵子

柏図書館専門員
兼 柏図書館情報サービス係長

つくばエクスプレス線柏の葉キャンパス駅西口からバスで10分程の場所に、東京大学柏キャンパスがあります。柏図書館は、この場所に平成17年2月22日正式開館しました。2階建ての建物の南北及び東の3面はガラスカーテンウォール構造で、内部に外光を取り入れた明るく開放的な雰囲気を持っています。

柏キャンパスは東京大学の本郷・駒場・柏という三極構造構想の一翼を担っています。この中で柏図書館は、東京大学が柏キャンパスや新領域創成科学研究科の創設時に掲げた理念である「学融合」と、その実現のための基本的な精神である「知の冒険」を実践する場として生まれました。このため柏図書館は、次世代型図書館として、ハイブリッドライブラリ機能、サイバーメトリック機能、ソーシャルコミュニケーション機能というコンセプトで計画されました。ハイブリッドライブラリ機能としては、利用者が図書・雑誌・オンラインリソース・映像など多様な学術情報資源にアクセスし情報を活用できるよう、サービスを提供しています。また、全学の自然科学系学術雑誌のバックナンバーセンターとしての役割を持ち、100万冊相当収容規模の自動化書庫に蓄積した学術情報資源をe-DDSサービスを通じて学内に提供しています。

サイバーメトリック機能としては、高性能な計算機を備え、多様な情報コンテンツを作成・加工し、新たな知の創造に役立てることを目指して、現在ナレッジワークスタジオの設備を整備中です。

ソーシャルコミュニケーション機能と

しては、異分野や海外の研究者・学生と協働し学融合を図るためのクリエイティブ空間の提供を行っています。また、教育学習空間だけでなく、社会文化的空間の充実を図り、地域社会・産業界との連携・協働も可能にしています。具体的にはメディアホールやコミュニティサロンを大学と地域の交流の場として提供し、

閲覧室の開放など地域に対して東京大学の蓄積した情報を提供しています。

この他、柏図書館は従来の図書館機能に加えて交流機能を併せ持つと共に、憩いの場の提供も重要であると考えています。時代の変化に呼応しつつ、新しい大学図書館モデルを築き上げることを目指しています。是非一度お越し下さい。

e-DDSサービス*〈学内向けサービス〉

利用者から閲覧依頼された文献を電子ファイルで提供するシステムです。現在、柏図書館のみならず総合図書館（本郷）や駒場図書館でもサービスを開始してい

ます。利用は学内者に限定されており、依頼から閲覧までの所要時間は、柏図書館が約1時間、総合図書館と駒場図書館が約1日となっています。

依頼から到着まで



申し込み

利用者は自分のデスクのパソコンで「〇〇という学術雑誌の△△号の××ページから××ページまでを閲覧したい」という旨を申し込み画面から図書館に依頼します。

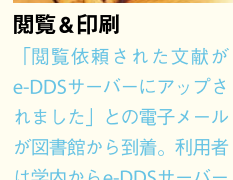


待つことしばらく……

e-DDSサーバー

文献画像ファイル

画像転送



閲覧 & 印刷

「閲覧依頼された文献がe-DDSサーバーにアップされました」との電子メールが図書館から到着。利用者は学内からe-DDSサーバーにアクセスし、閲覧します。1部のみ、印刷することも可能です。

スキャン & pdf化

依頼文献を専用マシンでpdfファイル化します。

図書館の動き



受付

閲覧依頼を図書館が受付。受付時間は9:00～17:00となっています。

出庫指示

自動化書庫

係員の指示により、自動化書庫（次ページ参照）がスピーディに目的の文献を探し出します。



出納ステーション

探し出された文献は、コンテナごとベルトコンベアで運ばれてきます。

*e-DDSサービスとは、「文献画像伝送システム」 Electronic Document Delivery System & Servicesのことです。

自動化書庫ってなに?

欲しい本を書庫から出納カウンターまで自動で素早く届けてくれる最新の出納システムです。本の出庫指示から到着まで約2分、利用者を待たせません。柏図書館では自然科学系学術雑誌のバックナンバーを収容しています。

ラック

一見、巨大な倉庫に見えますが、これは言わば「本の倉庫」。本を納めたコンテナがこの大きなラックいっぱいに取り込まれています。



コンベア

目的の本を載せたコンテナはコンベアで出納ステーションまで運ばれます。

スタッカークレーン

ラックの間を前後に移動する「巨大なタワー」。探すべき本が入ったコンテナをベルトコンベアまで運びます。移動速度が速いので、目の前で見ているとかなりの迫力!



1. 目的のコンテナがスタッカークレーンに移されます。
2. かなりの速度で移動してくるスタッカークレーン。迫力です!
3. コンベアの前で停止。コンテナはコンベアに移されます。



プロプリウス21とは?

法人化以降、「知の社会還元」は本学の重要な課題となっている。その方策として産業界との共同研究が挙げられるが、従来の産学共同研究には研究自体が第一目標になってしまい、企業と大学で成果目標が共有できないこともあった。また、徐々に研究テーマが矮小化する、最終的な実用化の出口がない等のケースもあった。「共同研究に着手したは良いものの、思うような『知の社会還元』が実現しない」という状況が時にはあったのだ。そこで本学産学連携本部が考案したのがProprius21というスキームである。

Proprius21は共同研究そのもののスキームではなく「計画作成プログラム」である。研究開始前に、テーマ、メンバー、資金、スケジュールを十分練るための枠組みなのだ。具体的には3つの活動により遂行されていく。まず「プラザ活動」。産学官有志が自由に意見交換する活動だ。この場で、産業界からは市場ニーズが、官公庁からは様々な政策等が、大学からは技術の種（シーズ）が提示される。次に「個別活動」。小グループ討論等により共同研究テーマを具体化させ、学内の研究メンバー候補者を集めていく。その際、技術コーディネータが候補者探しを手伝ってくれる。

最後に「スロット活動」。特定研究テーマを立案する組織を「スロット」と呼ぶが、このスロットにより目的、期間、分担者、アプローチ方法、費用、期待できる成果、社会貢献、問題点への対応策等を「研究計画」として策定する。スロット経費で専従技術コーディネータの雇用も可能。研究計画はレビューによるレビューを受け、一年以内を目安に完成度を高めていく。計画が実行可能になった段階でスロット活動は終了。Proprius21も全行程を終了し、共同研究が開始される。

知の社会還元の効果的な実現。Proprius21はまさに、そのためのツールなのである。

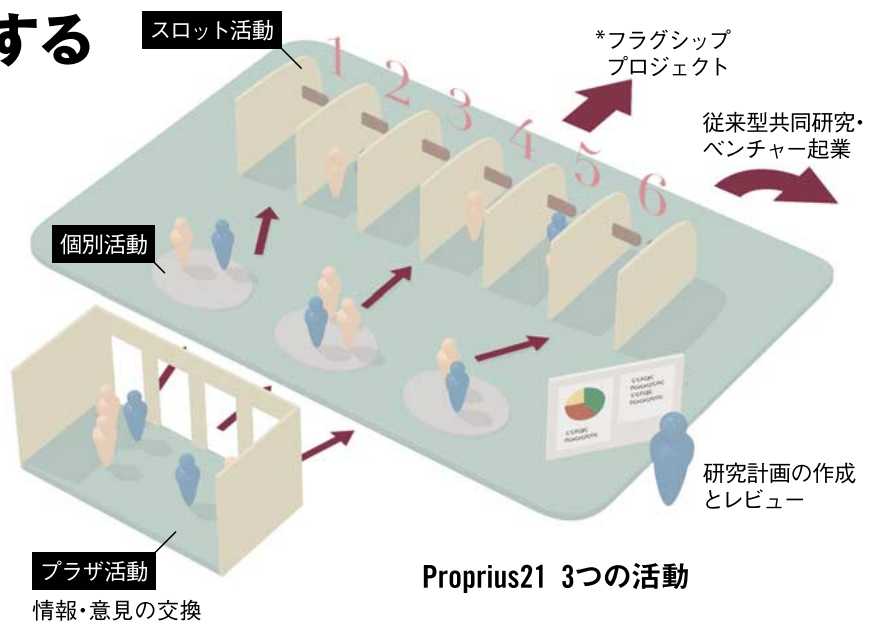
産学連携本部

「知の社会還元」を実現する Proprius21

企業との共同研究を成功させるために考案された「共同研究計画作成プログラム」、Proprius21。このプログラムにより策定された共同研究は現在、「知の社会還元」を着々と実現しつつある。



Proprius21における、研究プラン策定までの流れ。プラザ活動、個別活動、スロット活動の各フェーズで産官学のポジティブかつ建設的な議論が展開されていく



Proprius21 3つの活動

【実例】「生活支援ロボット」をテーマとした松下電器産業との共同研究

Proprius21を使って共同研究に着手した例として松下電器産業（以下、松下）との共同研究がある。この研究の現在までの流れを紹介しよう。まず、松下が生活支援ロボットに目標を定めて学内全体に新規シーズ公募を行ったのが2004年11月。集まった企画案が12件。2005年1月に松下社内での第一次審査を経て東大・松下合同検討会議を行い、12テーマ中、4テーマの採用を決定した。その後は同年3月～7月、各企画をブラッシュアップしていった（スロット活動）。この作業は企業・研究者の両者にとって初の試みであり、様々な試行錯誤があったようだ。

「先生方とのミーティングを各5回から7回、行ない、摺り合わせていきました。その間、

紆余曲折があった。現在、センサー融合技術関連の共同研究をお願いしている先端研の矢入先生には何度か企画を練り直していただきました」と松下電器産業産学連携推進センター・平岡省二推進担当参事。本学先端科学技術研究センター・矢入健久講師の企画案は松下のニーズとのズレがあり「企画変更を」との提案が松下側からなされたそうだ。

「松下さんから変更を提案されたことは新鮮で面白かったです。新たな研究課題を与えられた気分でした」と矢入講師。その後は4テーマとも建設的な議論が展開され、徐々にテーマの詳細やプランが固まっていた。こうして、2005年7月、合意に至った3テーマのキックオフ会議が開催され、晴れて共同研究契約が締結されたのだった。

Proprius21で策定されたこれらのテーマはその後、大きく発展していくこととなる。

生活支援ロボット 共同研究開始までの流れ

2004年11月	生活支援ロボットについての新規シーズを本学全体から公募開始!
2004年11月	共同研究テーマ創出を旨としたワークショップ(意見交換会)を実施
2004年12月	学内6部局より、12テーマの提案が集まった
2005年1月	東大・松下合同で提案テーマの一次選考会議を実施。4テーマに決定した
2005年3月～7月	実施テーマ提案者（東大側）と松下担当者がテーマ別に検討会議。双方が納得するまで、ターゲット・計画をブラッシュアップしていった
2005年7月	キックオフ会議を開催。テーマレビューが行なわれ、共同研究契約が締結された

その後……

「生活支援ロボット」共同研究は「少子高齢社会と人を支えるIRT基盤の創出」プロジェクトに発展し、文科省・科学技術振興調整費プログラムに採択された。

※詳細は以下の「産学連携本部ホームページ」をご覧ください。
URL:<http://www.ducru.u-tokyo.ac.jp/>

*フラグシッププロジェクトとは
これからの日本や国際社会を担う大型研究のこと。

東京大学創立130周年記念事業 時代の先頭に立つ

東京大学は2007年4月12日をもって創立130周年を迎えます。これを機会に、本学では2006年11月から1年あまりにわたって『130周年記念事業』を展開していきます。ここでは、この記念事業の趣旨やシンボルマーク等についてご紹介いたします。



濱田純一

記念事業実施委員会委員長
東京大学理事・副学長

世界では、政治経済や技術・生命など
の分野で高度な課題が発生し、グローバルな見地からの解決が求められています。一方、それを支える学術は、小宮山総長が指摘しているように、爆発的な知識の増大と、研究の細分化との同時進行により、全体像の把握がままらなくなっています。こうした両極端の状況の中にあ

って、統合された知
に対する社会の期待
は高まっています。課
題先進国日本の代表的な
知の府として、学術の統合
を担う東京大学の役割は、ま
すます大きくなっています。

国立大学法人化を経て、
東京大学はいわば「第三の
創業」ともいうべき
段階にあります。この
段階をとらえて、
東京大学のあるべき姿と進むべき方向をあら
ためて世に問い、多くの方々とこれから歩む
べき道のりを共に語り合う機会として、創立
130周年記念事業を行います。未来に向けて、「東大としてのアイデンティティ」をこの事
業で表現していきたいと考えています。その
ため、教職員や学生、さらに卒業生の皆様にも、事業への積極的な関与と参加をお願い
しています。また、事業を通じて、志を同じく
する社会のさまざまな方々にも広く呼びかけ、
連携支援のきっかけとなるよう期しています。
多くの人々の参加による多様な記念事業を通
じて、東京大学のこれからの姿や次の時代を
支える思想をお伝えできればと思います。



入選マーク3作品



丸尾圭祐さん 作品

東京大学のシンボルである、い
ちちょうの葉をデザインベースとし、
学問の世界を包み込むスケール、
さまざまな学問分野の連関、独立
性、外の世界に開かれた様を表現
しました。

モノクロで印刷された場合の可
読性にも配慮しました。



筑紫一夫さん 作品

二つの円の重なりが、東京大学
と社会との関わり合いを表し、そ
の関わりの中から生まれる無限の
可能性を(∞)をモチーフにデザ
インしました。シンメトリーなフ
ォルムは、人や社会、研究に対し
て誠実に向き合う東京大学の姿勢
を表現しています。



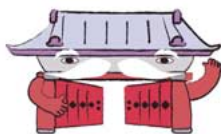
小石澤泰子さん 作品

外形を形成する3つの輪は本
郷・駒場・柏という新時代の東京
大学三極構造を示す一方、新時代
における「人」と「人」、また「社
会」と「大学」という関係の重要
性を示すものである。後者に関し
ては中央に位置するUTの文字(U
は逆転させている)を人と人が手
を取り合っているようにみせるこ
とも表現している。さらに中央
に存在する扉は未来への扉を意味
し東京大学が新時代に未知のステ
ージへと挑戦しようとしているこ
とを示している。

130周年記念事業 公式シンボルマーク

このマークは「知の生命体」をコンセ
プトにデザインされています。未来に向
かう東京大学の「新しい知」を発見し続
ける力と「新たな才能」を育み続ける力
を、成長・進化を続ける〈未来的な、
知的な生命体〉として表現しました。
21世紀の様々な学問的社会的なテーマに
積極果敢に取り組む姿勢、専門領域や国
境の壁を越えて生み出される〈知のダイ
ナミズム〉をも象徴しています。

入選キャラクター3作品



溝口照康さん 作品

【愛称:赤門爺(あかもんじい)】
国の重要文化財であり、東大の
シンボルでもある赤門をモチーフ
にしたキャラクターです。古くか
らその門を開いて、来る人を迎え
入れる威厳ある姿、それでいてあ
たたかい雰囲気表現しました。



市村桃子さん 作品

【愛称:U-Tan(うーたん)】
「University of Tokyo」のUTをキ
ャクターにしました。顔が「U」、
体が「T」をもじったウサギの
『U-Tan』です。口は安田講堂の形
を簡略化し、体の真ん中には東京
大学のシンボルであるイチョウを
描きました。ウサギのイメージカ
ラーであるピンクと自然豊かなキ
ャンパスをイメージして体のTの
部分を黄緑にしました。みんなに
愛され、身近に感じてほしいと思
い『うーたん』と呼びやすい名前
をつけました。



宮崎彩さん 作品

【愛称:Gustoff(ガストフ)】
130年という長い歴史の中で常
に日本のトップに居続けてきた東
京大学ですが、これからはさらな
る飛躍を望まれています。
グローバル化や世界との競争の
中で、これまでの伝統(いちょう
で表しました)のつとめて、さら
なる飛躍となるような、世界の
“gust of wind”となるような、明るい
未来を示すキャラクターにしまし
た。
伝統の上に成り立つ東大の新し
さを描きました。

歴史のきざしから

第2回

一高野球部、大勝利の日

今や、国民的スポーツにまで成長した、日本の「野球」。輸入文化であるベースボールがわが国に地歩を築くまでには様々な紆余曲折があった。その草創期には本学教養学部の前身、第一高等学校の野球部がきわめて大きな足跡を残している。

時々、プロ野球関係者は「米国のベースボールと日本の野球は違うんですよ」などと言う。言われてみれば、たしかに野球ファンなら一度は「同じルールなのにまるで違う競技のようだ」と感じたことがあるはずだ。思想、宗教、スポーツ、食べ物……日本は輸入文化を独自に発展させてしまう国である。もっとも、ベースボールに限って言えば、「野球」という和名を考え出したからこそ、より日本のスポーツとして発展を遂げられたのではないだろうか？

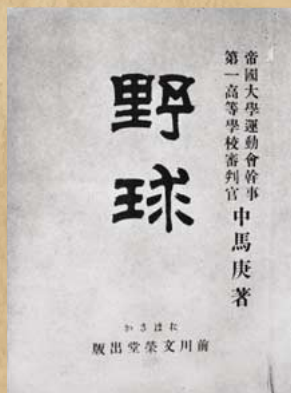
一般的に、ベースボールという競技に「野球」なる訳語を当てたのは正岡子規だといわれている。が、どうやら真相は違うらしい。最初にベースボールを「野球」と呼んだのは、本学教養学部の前身、第一高等中学校（以下、一高）野球部の中馬庚なかま かつという人物なのである。中馬庚は一高野球部初代チームの選手。明治21年に一高に入学した彼は二塁手として活躍した。その一高は明治27年に第一高等学校と改称しているが、彼は東京帝国大学文科に進んだ後も一高野球部の顧問を務めていた。一高野球部は明治29年の時点で38連勝という大記録を打ち立てており、国内の邦人チームの中では飛び抜けて強かった（第一回黄金時代と呼ばれている）。その勢いもあって、中馬は初の『野球部史』を編纂するが、その際

に「野球」という訳語を考え出して部史に載せたのである。彼は翌年、『野球』（明治30年発行・前川善兵衛刊）という野球解説書を著しており、名著との評判が高い。中馬が日本野球史に残した功績はかなり大きいといえるだろう。

そんな日本野球草創期に、誇り高き一高野球部は「初の国際試合」に臨んだ。試合の顛末はきわめて詳細に記録されている。

明治28年当時、邦人チームの中で向かうところ敵なしだった一高野球部は、横浜のアマチュア外人倶楽部に何度も試合を申し込んでいた。この倶楽部は横浜在住の米国人が組織しているもので、ベースボールの腕には大層自信を持っていた。かのスポーツは米国の国技だし、彼らは体格的にも当時の多くの日本人を上回っていたので当然といえば当然だろう。その外人倶楽部が一高の度重なる試合申し込みに折れ、ついに明治29年5月23日、本邦初の国際試合を行なう運びとなったのである。

ところが、5月20日からずっと雨が降っていた。心配になった一高の投手・青井鉞男あいつおと顧問・中馬庚は、当日雨天の場合の相談をするため横浜に赴いた。外人倶楽部の答えは「23日が雨の場合、24日は日曜日で



(写真・上) 初国際試合の翌年に出版された中馬庚の著書、『野球』。

(写真・右)『野球部史』は『校友会雑誌』の号外として出版された



明治24年一高チーム。中列左から二番目が中馬庚。現役時代は二塁手だった

明治廿九年五月廿三日試合表
我 校

Seat.	Names.	Innings.	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	Sum
S.S.	Iham	井原	X ^L	O	O	X ^I	X ^I		O	O		4
III.B.	Murata	村田	X ^L	O	O	S	X ^P		O	S		3
I.B.	Miyaguchi	宮口	O	S ^{III}	O	X ^I		X ^{II}	X ^I	X ^P		2
L.F.	Tomisaga	富永	O	X ^P	O		O	O	O			5
P.	Aoi	青井	S ^{III}	X ^I	X ^I		X ^{II}	X ^P	X ^I			0
C.	Fujino	藤野	X		X ^P X ^{II}		O	X ^I	X ^L			1
III.B.	Inoue	井上		X ^{PL}	O	O	O		O	X ^I		4
L.F.	Kaminura	上村		O	O	O	O		O	O		6
C.F.	Moriwaki	森脇		O	O	X ^{III}	O		O	X ^{III}		4
	Total		2	4	7	2	5	1	6	2	a	29+a

安息日だから試合は出来ない。25日以降も試合は無理だ。我々にはビジネスがあるので忙しい。だから当日が雨なら試合は秋か来春に持ち越すしかない」というものだった。二人は意気消沈して、本郷・向岡の一高自治寮に帰ってきた（一高生は全員寮住まい。当時の学生数は約千人である）。

横 濱 ゲーム

Seat.	Names.	Innings.	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	Sum
III.B.	Smith		X ^{III}	X		X ^I	X ^P			X ^I	0
R.F.	Giun		O	X		X		X ^I		X	1
C.	Ellis		O		X ^P	S		X ^{II}			1
S.S.	Abel		O		X ^P	S		X			1
I.B.	Tikler		O		X	S			S		1
P.	Schweyer		X		X ^L	X ^P			X ^I		0
L.F.	Crawford		X			S	S		X ^I		0
C.F.	Hunt			S	X ^I		X		X ^P		0
III.B.	Lyons			X	X		X ^I			X ^I	0
	Total		4	0	0	0	0	0	0	0	4

初の国際試合のスコア<校友会雑誌第58号附録「野球大勝記録」より>

その後、雨は前日になっても止まなかった。初の国際試合の話は一高全体に知れ渡り、野球部員のみならず、一千名の寮生の中に「決戦前の悲壮感」が漂っていた。夜中になり、日付が変わると、控え所に「選手は本日をもって南浜に赴き、決然敵地に入る……」といった檄文が貼られ、寮生の中には「雨の中（横浜までの）8里の道を下駄で歩いて応援に行く」などと意気込む者まで現れる始末。選手達も他の寮生も空模様が心配で起きていたが、午前3時頃に小降りになってきたため選手達を眠らせ、他の寮生が代わる代わる天候を見守った（見守ったとてどうなるものでもないはずなのだが……）。

当 日朝8時。雨はまだ止まない。が、そこへ横浜より電報が！「シアイケルスグコイ」。もう、大騒ぎだ。寮生の間から次々に「万歳！」の音があがる。念願の国際試合が実現するのだ。

ちなみに、この後に横浜から、もう一通の電報が届いた。「ナンジニクルカ」。これを読んだ中馬は突然、怒り出し、電報を床に叩きつけた。「無礼な奴らだ！『汝、逃ぐるか』とは何たる失敬！」。しかし、すぐに笑い始めたという。電報の文面が「何時に来るか」という意味だと気づいたからである。顧問である中馬庚からしてこの有様だったのだから選手達の国際試合に対する意気込みはさぞ激しかったに違いない。

かくして、一高野球部員は汽車にて新橋から横浜へ。400名を超える寮生達も一緒に応援に向かった。そして午後3時、横浜公園グラウンドで本邦初の国際試合がプレイボールと相成ったのである。当時の一高『校友会雑誌』には熱気あふれる試合状況が記され

ている。「後三時我先つ守り判定者ストーン氏令を下して開戦を命す球は米國製の新球なり滑脱取すべからす我青井投球常を失しミスFour Ballの恩に浴す……」(校友会雑誌第58号附録『野球大勝記録』、明治29年6月20日刊)

1回表、青井投手は外人倶楽部に打ち込まれ、4点を先制されてしまう。が、一高野球部は1回裏に2点、2回裏に4点を上げ、逆転する。

「校友の聲援耳を聳し洋客の嘆賞寧ろ憫むべく我終に四点を奪ふて二点を贏す是に於て勝負の決已に定まり……」(同『野球大勝記録』)

こ の後が凄かった。外人倶楽部は毎回無得点、一高野球部は毎回得点、その結果、29対4というスコアで一高が大勝してしまったのだ！

一高生の喜びようたるや、如何ばかりだったか。その夜、一高ではファイヤーストームが催された。会の冒頭に、寮総代・守随啓四郎が挨

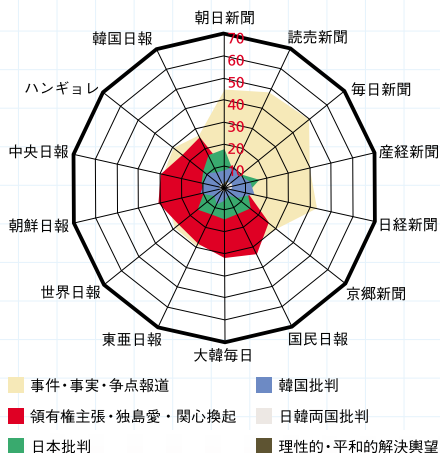
拶したのだが、その言葉がまた凄い。「今日勝單に我校の勝ならず聊て邦人の勝ちと稱するを得べし」。今日の勝ち是我が校だけでなく日本人全体の勝利だと言うのである。実際、この守隨の考え方は日本人の多くに共通していたらしく、一高大勝利の報は瞬く間に全国に喧伝された。一高はこの試合を皮切りに、計4回、外人倶楽部と対戦するのだが（3回目まで一高勝利。4回目で敗北）、試合のたびに世間の反響が大きくなり、それまで野球の話題など取り上げなかった新聞が大きく報じるようになった。これには当時の世相も深く関係しているようだ。明治27年～28年、日清戦争があり、我が国は勝利を収めていた。当時は、多くの日本国民が戦勝の勢いを感じていたとともに、明治初期からの不平等条約への反感もあったのではないだろうか。

初の国際試合制覇という快挙を成し遂げた一高野球部。彼らのプレーは、すでに「日本野球」の醍醐味に満ち溢れていたに違いない。

Invitation
to
Science

サイエンスへの
招待

1990年から2001年までの
日韓新聞における
独島/竹島記事論調の比較。



「歴史認識」、「ナショナリズム」を科学することは可能か？

現在も韓国と日本の間を隔てている「独島/竹島」領有権問題。両国の国民はなぜ、かの島を自国領土だと信じるのだろうか？そして、その認識はどのように形成されてきたのだろうか？



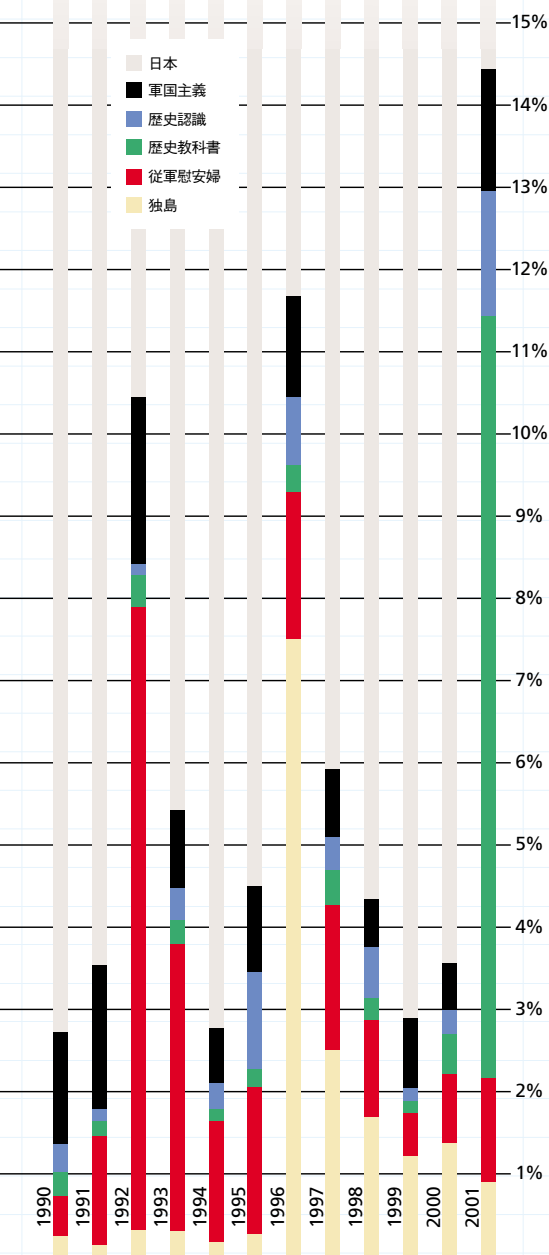
玄大松 (ヒョン デ ソン)
東洋文化研究所 助教授

<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/>



2005年3月、島根県の「竹島の日」制定を伝える韓国の新聞の一面

1990年から2001年までの韓国の新聞における日本関連記事のなかで歴史認識、軍国主義、従軍慰安婦、独島などの記事が占める比率。



韓国と日本がその領有権を争う「独島/竹島」は、歴史記憶とナショナリズムを喚起する一つのトポスとみることができる。ベルグソンがかつて「薔薇の匂いを嗅いで過去を回想する場合に、薔薇の匂いが与えられてそれによって過去のことが連想されるのではない。過去の回想を薔薇の匂いのうちに嗅ぐのである」と言ったが、私は、韓国人は「独島」の匂いから植民地支配の記憶をどれほど嗅ぐのであろうか、その匂いのうちに、韓国人は日本・日本人のどのようなイメージを思い浮かべ、また作り出すだろうか、などに関心があった。

そして「なぜ韓国人は独島を韓国の領土だと信じるのか」、「なぜ日本人は竹島を日本の領土だと信じるのか」のように、「独島/竹島問題」を領有権問題ではなく認識の問題として捉え、その認識に影響を与えるものは何かを解明しようとしてきた。「独島/竹島問題」を論ずるときに歴史認識、ナショナリズムの問題は避けて通れない。が、定義することすら難しい歴史認識、ナショナリズムなどをどのように分析することができるだろうか。つい最近、『領土ナショナリズムの誕生—「独島/竹島問題」の政治学』をミネルヴァ書房から上梓したばかりである。そのなかで私は「独島/竹島問題」におけるマス・メディアの影響に注目し、日韓のマス・メディアが作り上げる「擬似現実」、世論の「生産」と「消費」との双方向的なメカニズム及びそれを可能とする社会・文化的な条件などが何かを解明しようとした。すなわち「独島/竹島問題」の事実が、政治家のレトリック、知識人の言説、そしてマス・メディアを通じて一般大衆にどのように伝えられるのか。その際「語られているもの」は何であり、その影に「語られていないもの」は何か。「独島/竹島問題」を論じる際に引き合いに出される表象は何か、な

どを分析した。また、そのようにして形成された韓国人の認識構造はいかなるものであるかをも分析したのである。限られた紙面の関係上、詳しいことは省略するが、日韓のメディアテキストにおけるディスコースの内容と諸特性を比較分析した結果、韓国で構築された「独島論の言説空間」が偏った空間であることと、独島の領有権主張に歴史認識問題などを結びつけ、歴史の記憶を絶えず想起させていることなどが明らかになり、また韓国人はマス・メディアが作り上げた「擬似現実」に強く影響され、幼児期に既に、「独島は韓国の領土」という認識と、否定的日本イメージを抱くようになり、教育の役割は既に形成された認識を公認する役割をすることが明らかになった。また独島認識と日本イメージとが関連性が高く、かつ独島認識と日本イメージとが対日態度に影響を及ぼすことなども確認した。

私は上で「明らかになった」、「確認した」と書いたが、これは「独島/竹島問題」に関する12年間の新聞記事2,734件の内容分析、韓国の中・高・大学生2,112人のアンケート調査の分析によって下した、一応「科学的な」結論である。社会科学において重要なのはその手法の科学性より「認識論的切断」が可能で自由な精神であるということと言うまでもない。しかし、感情論に近い歴史認識論、ナショナリズム論を日韓関係の言説空間においてこれ以上一人歩きさせないためには、ポリティカル・サイエンスをサイエンスらしくするための努力は続けなければならない。

玄大松著「領土ナショナリズムの誕生」(ミネルヴァ書房・2006年)



バリアフリー科学の夢

バリアフリー社会の実現に向けて、様々な学問が大きな原動力となりつつある。そんな原動力のひとつ、「福祉工学」は、すでに視覚・聴覚・発声障害者に明るい未来を示し始めている。



伊福部 達

先端科学技術研究センター 教授

<http://www.rcast.u-tokyo.ac.jp/ja/>

喉頭摘出者のための抑揚
が出せる人工音声生成器
「ユアトーン」((株)電制、
道工試との共同研究によ
る)

音声パターンやメロディ
を指先の触覚に伝える聴
覚障害者用「タクタイル
エイド」((株)ティジー
との共同研究による)

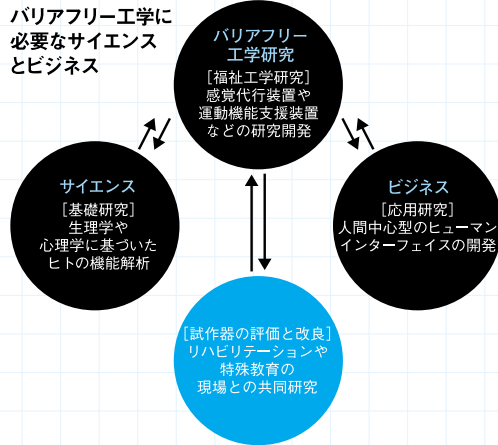
わ が国の少子高齢化や情報格差などが背景になり、「バリアフリー社会の実現」は急がなければならない課題です。私たちはこれまで、「福祉工学」という分野を通じて、弱ったり失ったりした聴覚、視覚、手足などを技術で助けるための研究をしてきました。実用化された例として、発声障害者のための「人工喉頭(製品名:ユアトーン)」、聴覚障害者のために声を字幕にする「音声自動字幕システム」や触覚に伝える「タクタイルエイド」、視覚障害者のために文章を音声と触覚に高速に伝える「触覚ジョグダイヤル」や立体音響で伝える「音響バーチャルリアリティ」、さらに弱った手足のリハビリテーションのために生かす「MH(水素吸蔵合金)アクチュエータ」などがあります。

福祉工学は、体の一部が低下したり失われたりしても快適な生活が送れるようにするのが目的ですので、医療の目的と変わりません。ただし、福祉工学は障害自体を治すのではなく、技術によって生活の場や体の機能を補完するという立場をとります。その点で、人工心臓のように体に人工物を入れて治すという医療技術とは大きく違ってきます。しかし、

文章を高速音声にして聞かせながら非文字情報を指先の触覚に伝える視覚障害者用インタフェース「触覚ジョグダイヤル」((株)アニモ、札幌市大との共同研究による)



バリアフリー工学に
必要なサイエンス
とビジネス



体の機能を補完するといっても、ロボットのセンサや手足が壊れたので、それを他のものに置きかえればよいという簡単なものではありません。

人間の脳には、環境の変化や機能の低下・欠損によって、今まで使われていなかった脳のある部分が働き出し、新たな能力が生み出されるという面があります。手を失った人が足で自在に文字を書くようになり、視覚を失った人が音だけで部屋の大きさや、目の前の障害物の存在を感知するようになるといった例が挙げられるでしょう。このような脳の変化は「可塑性」と呼ばれるもので、それによって代償機能が生まれることが知られています。この代償機能を壊さないようにしながら機能を補完することが重要になります。

その一方で、難聴になると単に聴力が落ちるだけではなく、言語の処理能力が変わったり遅くなったりするという脳の変化もできることがあります。そのため、声を大きくして耳から脳に送るだけの補聴器は、高齢で難聴の人たちの約半分が役に立たないといえます。本当に役に立つものにするには、脳内における言語処理の状態を検査し、その結果にあわせて補聴器を設計する必要があるわけです。

また、バリアフリー社会は工学的な技術開発だけでは実現し得ないといえるでしょう。モノを知覚する脳の動きやそれに伴う人間行

動の研究、バリアフリー製品が普及したときの経済効果の調査、ユーザーによる評価などを扱う「バリアフリー科学」が必要になります。先端研には多様な分野の専門家がいることから、バリアフリー科学を実現する場としては最適どころです。そして、これまで社会保障費を受けて生活していた人たちがバリアフリー技術の助けでもう一度働くチャンスを得て、生きがいのある生活を取り戻すようになるという役割も果たすでしょう。

さらに、バリアフリー科学はヒトの機能と同じような機能を技術で実現するという難題に挑戦することになるので、従来の科学技術の延長では考えられなかったようなイノベーションが生まれるかもしれません。私たちは、そのイノベーションにより新しい市場が開かれ、より多くの人々が科学技術の恩恵を受けられればという「夢」を抱いています。



聴覚障害者のための「音声同時字幕システム」(夕張国際映画祭にて、(株)ビー・ユー・ジーとの共同研究による)



中田好一
大学院理学系研究科
教授
木曾観測所長

キャンパス散歩

理学系研究科附属天文学教育研究センター 木曾観測所

新宿から中央線に乗り、塩尻で中央西線に乗り換えて30分で列車は木曾谷の中心の町木曾福島に到着します。皆さんの中には「夜明け前」に出てくる代官所の町として思い出される方もあるでしょう。今では「くるまや」や「源氏」を始めとするそばの名店が集まる町としての方が有名かも知れません。木曾福島から今度は車に乗り、木曾川を越えて西へ御嶽山に向かって走り、途中で横にそれて山道を登り尾根の上に出るとそこが「木曾観測所」です(写真1)。地元では専ら「東大天文台」の名で呼ばれています。門には「熊に注意」の札が貼られています。去年は各地で熊が出没しました。観測所でも「先週はゲートの前の木に登っていた。」「昨日は構内の道を横切った。」とクマ話で持ち切りでした。昼休みにキノコ採りに山に入れなくなった職員は不幸な秋を過ごしました。

門から本館までは1kmほどあり、絶好の散歩道を提供しています。北から西の方には穂高、乗鞍、御嶽(写真2)が並び、東は木曾山脈の駒ヶ岳、宝剣、空木、南駒が一望される素晴らしい尾根道です。道の途中に見える変わった形の大きなアンテナ(写真3)は名古屋大学太陽地球環境研究所の太陽風アンテナです。アンテナを過ぎると道の先に望遠鏡ドーム(写真4)が見えてきます。中に入っている口径105cmのシュミット望遠鏡(写真5)は木曾観測所が1974年に創設されて以来の主力装置で、現在も全国からの研究者がひんばんに訪れて来ます。この望遠鏡は普通の天体望遠鏡とちょっと違って、像の焦点位置が望遠鏡の筒の中にあります。昔は筒の中にガラス乾板を装着して、現在は筒の中にあるCCDで、写真(写真6、7)を撮る仕組みなのです。このために直接自分の目で星を見るわけにはいきません。訪問客には大変評判が悪いのですが、「こんな大きな望遠鏡なら雨が降っていても星が見えるでしょう?」と志ん生のようなことを云う方もおられますからどっちもどっちですね。

シュミット望遠鏡ドームから少し離れて30cm望遠鏡(写真8)があります。この望遠鏡は

小型なので、主に明るい星の明るさを測る目的に使われています。こちらは自分の目で天体を見ることが出来ます。ドームから100m程で本館(写真9)の前に出ます。この先は木曾の森です。本館では10人程の職員と観測に訪れた研究者が働いています。ここで皆さんに見て頂きたいのは7,000枚に及ぶシュミット写真乾板です。シュミット望遠鏡は広視野の写真を撮るための特殊望遠鏡で、36cm角という大きなガラス乾板に星空を写し取ることが出来ます。乾板保存室には30年間に渡る観測の成果が観測開始時から1枚づつ番号を振られて保存棚(写真10)に並べられています。

木曾観測所は10年前から全国の高校生を対象に「銀河学校」(写真11)という教育合宿を主催してきました。また、5年前からは文部科学省が行っているSPPという理科教育プログラム(写真12)に参加しています。以前は食堂を使って講義や実習を行っていましたが、参加者が50人になると入りきれません。このため、3年前に講義室が増設されました。最近では天文実習を希望する大学も増えていきます。実習に訪れる学生の印象を聞くと、研究の現場の雰囲気は彼らには印象的なようです。

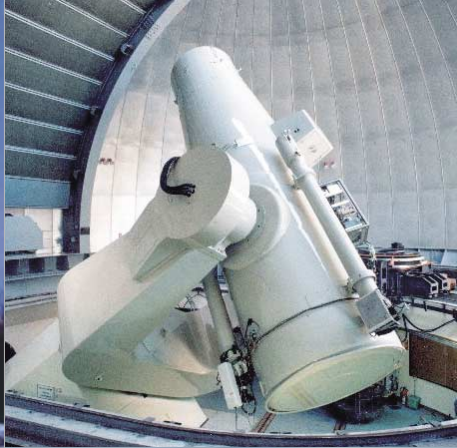
本館のすぐ裏からは木曾の森(写真13)が広がっています。暖かくなると狸が草むらで遊んでいる(写真14)のが越越しに眺められましたが、去年はあまり現れませんでした。夏ごろ、熊が茂みから頭をつきだしてこちらをうかがっていたりしましたから、熊に追い払われたのかも知れません。全般的には観測所の周りで動物に会う回数が増えていっているような気がします。冬の構内は凍っていますが、4月になると雪の間からフキノトウが顔を出してきます。道からはずれた林の中ではハルリンドウも咲き始めます。里の近くでは福寿草やカタクリの群落が見られますが観測所の周りでは見かけません。5月の連休の頃、桜が開花すると堰を切ったように様々な花が開き始めます。北向きの尾根にはタムシバが真っ白な模様を描き、林のすそは山吹の黄色い帯で飾られ、それが白いハクウ

ンボクやズミ、エゴノキに取って代わられると間もなく夏です。筆者は銀河系中心の周りの星の研究を行っていますが、ちょうどこの頃が観測の好期です。何であれ白い花を見ると天の川を連想するのは職業病の一種かも知れません。

木曾観測所はバスの便もない山の上(写真15)で、昔の人なら木の葉に埋もれと形容するような場所ですが、皆さんどうぞ見学にいらして下さい。歓迎いたします。

1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	12
13	14	15

1. 木曾観測所ゲート
2. 御嶽山
3. 名大の太陽風アンテナ
4. シュミット望遠鏡ドーム
5. ドーム内部のシュミット望遠鏡
6. シュミット望遠鏡で撮ったアンドロメダ銀河
7. シュミット望遠鏡で撮ったスバルの星々
8. 「K.3T」30cm望遠鏡ドーム
9. 観測所本館
10. 乾板保存棚
11. プリズム交換作業中の銀河学校生徒
12. 講義を聞くSPP参加高校生
13. 本館屋上から見るシュミットドームと太陽風アンテナ
14. ためぎの親子
15. 千歳・名古屋間の機上からの眺め。中央上から本館、ドーム、30cm、太陽風アンテナ



Campus News

01

駒場コミュニケーション・プラザ、全館開館

駒場コミュニケーション・プラザ（KCP）が、2006年10月1日（日）、全館開館しました。生協購買部・書籍部と、音楽実習室・多目的教室・舞台芸術実習室・身体運動実習室などからなる北館は、2006年4月に開館しましたが、全館開館により、食堂・交流ラウンジからなる南館、集会・親睦会・合宿



左／駒場コミュニケーション・プラザ、南館（左）と北館（右）
右／駒場コミュニケーション・プラザ、和館

や華道・茶道などに利用できる和室6部屋からなる和館も利用できるようになりました。

北館2階の音楽実習室には、スタインウェイのグランドピアノも設置されており、学内外の演奏家による演奏会などが企画されています。

KCPは、駒場で勉学にいそしむ学生と、駒場を職場とする教職員の活動を支える場として、寮を取り壊した跡地に設けられました。

設計・建設と維持管理・運営については、特別目的会社「駒場コミュニケーション・プラ

ザPFI株式会社」に発注・委託するPFI方式がとられています。

KCPの完成により、かつて学生の生活を支えた寮や寮食堂があった空間に、再び若い歓声が帰ってきました。駒場キャンパスの東側のこの場所には、KCP開館以来、夜遅くまで人通りが絶えることがありません。今後も、華やかで開かれた駒場らしい空間として、機能し発展していくことでしょう。

02

連続シンポジウム「知の拠点サミット」第一回「情報革命と人類の未来」の開催

国際シンポジウム『情報革命と人類の未来』が2006年11月18日（土）午後2時30分から大講堂において、開催されました。本シンポジウムは、東京大学と朝日新聞社の共催により、5年間連続で毎年開催される「知の拠点サミット」の第一回目にあたります。

シンポジウムでは、まず小宮山総長が『情報革命と大学の役割』と題した基調講演を行いました。次に、シンガポール国立大学のシー学長が、『The Paradox of the Information Revolution』について、また、大阪大学宮原総長が、『情報技術革命の光と陰～その発達は人間社会をどう変えるのか』について、招待講演を行いました。

後半は、『情報革命と人類の未来』についてのパネル・ディスカッションが行われました。スイス連邦工科大学チューリッヒ校キ

ラー前学長が、『Information - the Fuel of a Sustainable Future』について、お茶の水女子大学郷学長が、『ユビキタスコンピューティングと女子大の役割』について、そして、カリフォルニア大学ロサンゼルス校ベッチェイ研究担当副学長が、『The Future of Information Society』について、それぞれ意見を述べた後、参加者全員により、情報革命の『明』と『暗』についてディスカッションが行われました。特に情報革命による陰の部分をもと克服すべきか、大学としてどのような役割が果たせるかに焦点をあてた活発な議論がなされました。

会場には一般の聴講者を中心に本学関係教職員及び学生・留学生等、併せて約650名の参加者が集い、講演や討論に熱心に耳を傾けていました。

なお、連続シンポジウム「知の拠点サミット」の第二回は、2007年11月17日（土）を予定しています。



本会議前に、学生ガイドが参加メンバー（希望者）に本郷キャンパスをご案内 撮影：尾関祐士

換し、東京大学の今後の方向に対してアドバイスと支援を得るために設置されたものです。

現在のカウンシルメンバーは15ヶ国24名の有力企業人、学識経験者、国際機関関係者などです。前日レセプションに引き続き、当日はタイのチュラポーン王女、ナラヤナ・マルチンフォシス会長、モーリス・チャンTSMC会長、ビル・エモット英エコノミスト誌前編集長、ポール・ラウディシナA.T.カーニー会長、黒川清内閣特別顧問などが参加して、5時間にもわたる議論が交わされました。

本会議では小宮山総長が東大の環境認識、自己分析、抱負、戦略、アクション・プランなどを説明した後、質疑応答を行いました。高等教育のあり方、東大の国際的イメージ、発展途上国との交流推進、学部教育の国際化の必要性、大学改革の進め方など多岐にわたり活発な意見が寄せられ、今後のカウンシルの運営についても具体的な提案を受けました。今後は年2回のペースで国内及び海外での開催を予定しており、第二回を2007年5月にロンドンで、第三回を同年11月に東京で予定しています。



上／パネル・ディスカッションで発言する小宮山総長
左／熱心に耳を傾ける聴講者



03

プレジデント・カウンシル第一回を開催

プレジデント・カウンシルの第一回会合が、2006年11月15日（水）本郷キャンパスにおいて開催されました。このカウンシルは、世界のトップ大学間の競争が厳しさを増す中、小宮山総長が世界の要人と意見交

04

柏国際学術都市支援会が発足

第一回「柏国際学術都市支援会」が、2006年12月18日（月）千代田区のパレスホテルにおいて、開催されました。本支援会は東京大学及び千葉大学が広く産業界に呼びかけて発足したものであり、つくばエクスプレス線柏の葉キャンパス駅を中心とする一帯を「柏国際学術都市」として整備するために、企業の方から広く意見、アイデアをいただくことを目的としています。

支援会は趣旨に賛同する企業のトップ14人により構成され、支援会会長にはキッコーマン株式会社の茂木代表取締役会長が就任しました。

この日の議事は、本学西尾理事が司会進行を務め、支援会の茂木会長、小宮山総長、古在千葉大学学長、堂本千葉県知事からのご挨拶に続き、大矢新領域創成科学研究科副研究科長が、「柏国際キャンパスプラン」について、北沢UDCK（柏の葉アーバンデザインセンター）センター長が、「柏の葉キャンパスタウン・アーバンデザインセンター」について、天野千葉大学理事が「環境健康都市の創造に向けて」について、それぞれ構想の概要説明を行いました。説明後、各委員の方々からは貴重なご意見をいただきました。次回は2007年の夏に開催される予定です。



上／支援会発足の様子
下／挨拶する小宮山総長

前号の淡青18号（2006年7月発行）において、一部誤りがございましたので、ここに訂正し、関係者の皆様へ深くお詫び申し上げます。
〔訂正〕3ページ・リード文4行目
誤：昭和22年 正：昭和24年

05

東京大学運動会
ヨット部クルーザー班、
2年ぶり3度目の世界選手権
出場を決める

東京大学運動会ヨット部クルーザー班が、去る2006年10月14～15日に神奈川県三浦市小網代沖にて行われましたJ/24関東選手権に同部艇「仰秀VI」にて出場、見事優勝を果たしました。更に11月3～5日に和歌山マリーナシティにて開催されたJ/24全日本選手権大会において、歴代最高の7位を獲得し、2年ぶり3度目のJ/24世界選手権出場を決めました。

東京大学運動会ヨット部は、“J/24”という種類の多人数乗ヨット（クルーザー）で活動するクルーザー班と、“470”や“スナイプ”などの少人数乗りのヨット（ディンギー）で活動するディンギー班とで活動しています。この度クルーザー班は、競技人口も世界規模であり大会参加者のほとんどが社会人チームによって占められるJ/24クラスで、大学生チームとしては極めて稀な関東選手権での優勝・全日本選手権での入賞を果たし、東大ヨット



上／全日本選手権レース風景。風を読むかが勝負の鍵
左／「仰秀」搭乗の東大クルー。6名構成

部がJ/24での活動を始めて以来初の快挙となりました。この結果により出場権を獲得した世界選手権においても大いに活躍が期待されます。

2007年度J/24世界選手権はメキシコ合衆国・プエルトバラルタにて2007年3月1～9日に行なわれます。

同大会は、オリンピック競技種目となっていないクルーザー競技においては、世界の強豪が一堂に集う唯一の大会です。この榮譽ある大会で好成績を残すべく、ヨット部一同層精進してまいりますので応援の程どうぞよろしくお願いたします。



東大HPトップ画面

東京大学で行なわれる各イベントに関する情報は、以下のアドレスからご覧になることができます。

東京大学ホームページURL

<http://www.u-tokyo.ac.jp>

東大 HP トップ



『主な EVENT INFO』



各トピックへ



『その他のイベント一覧』



各トピックへ

The University of Tokyo Magazine

東京大学広報誌

淡青

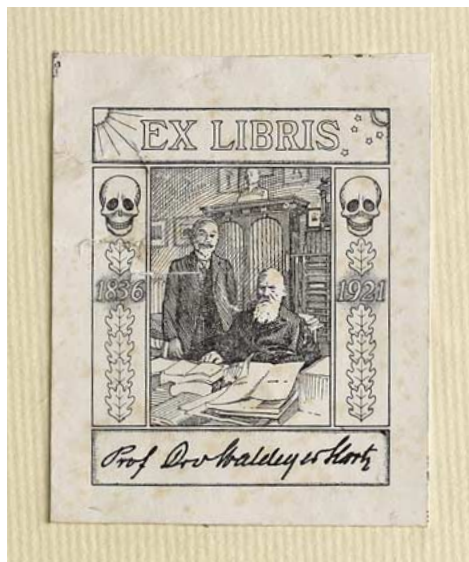
19

t a n s e i 2007/02

東京大学総務部広報課
〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
TEL 03-3811-3393 FAX 03-3816-3913
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
URL: <http://www.u-tokyo.ac.jp>

編集発行／東京大学広報委員会
高増 潔
（広報委員会委員長 大学院工学系研究科 教授）
沼野充義
（淡青アドバイザー 大学院人文社会系研究科 教授）

アートディレクション／
細山田光宣（細山田デザイン）
デザイン／
グスクマ・クリスチャン（細山田デザイン）
撮影／貝塚純一
印刷／石田大成社
発行日／平成19年2月28日



蔵書票

日本では所蔵本に蔵書印を押すのが一般的ですが、欧米では蔵書票という切手大の紙を貼り付ける習慣がありました。写真は「ワルダイエル文庫」(本学医学図書館所蔵)の蔵書票。蔵書票の中には美しい版画で刷られているものも多く、「紙の宝石」と呼ばれます。一般には、アール・ヌーボー時代、アール・デコ時代が蔵書票の黄金期と言われ、現在でも数多くの愛好家が古い蔵書票を収集しています。